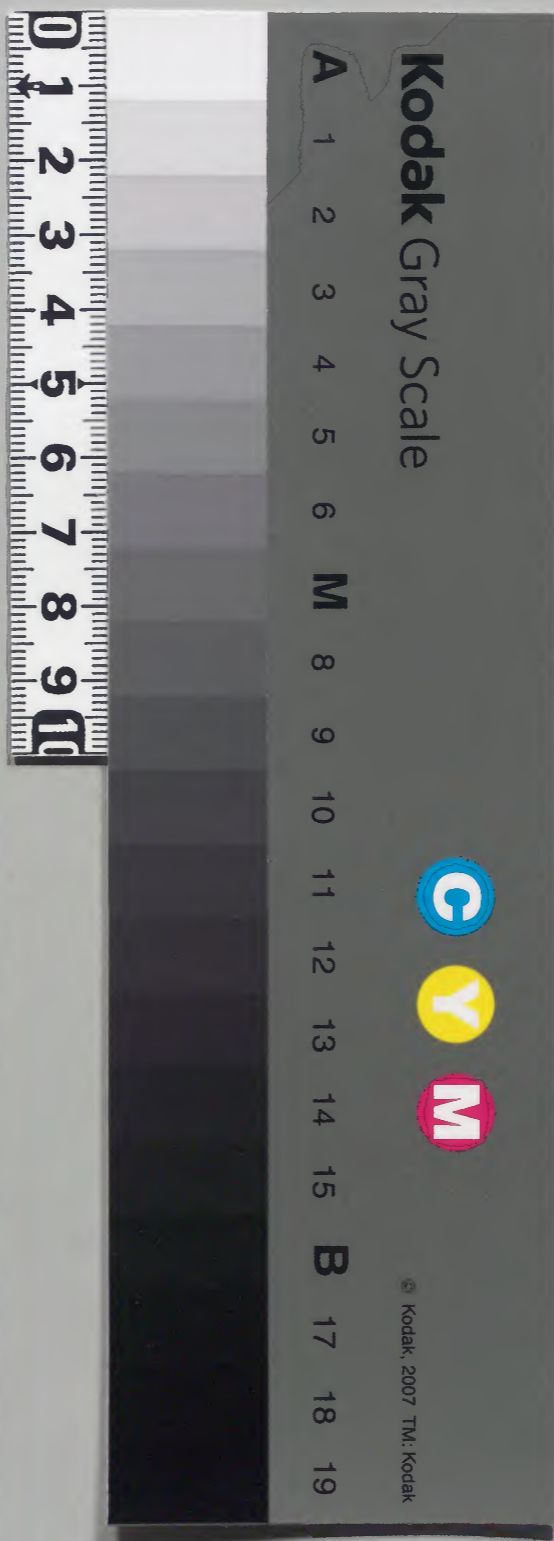


馬誌

冊八至五十四

内閣文庫	
番號	和 34566
冊數	10 (9)
函號	154 430

内閣文庫	
和書	三四五六
架冊號類	五十四函



綴じ部(喉部分)の文字等が開きが不鮮明な場所あり

五十七 卷之

差四
繩十

三尺
繩

對校

甲一即
七右馬

淨書 鑑印

馬誌卷之五十七目錄

四十八

器具部

差繩

三尺繩

用ひらるる車にや又公卿は差繩は位以下
疋繩といふ車有り飾いりたるをや疋繩とい
いひけん武士れ引馬ひくに引馬は上
輩追繩ハト北輩といふ車ハその引やうに
追繩といふ車有り形なり形ふ今母のつねに
馬ひく繩を追繩といひ其おに小口繩といふ
ものを又差繩といふの近きころよりの

右なるへー○小口繩を又小中間
○追繩をいふなり

本朝武林原始

一 差繩といふりの禮記の注に見えー鞞の字
よくかなはりといふへーはされとも是も吾國の
文にまいはるへ書んにいたし差繩と書へきよや
差繩の車軍器考に委く注し出されさるは
いっある故にや世に上古といふを江次等
馬の繩といへる則ち差繩の車なるへー
差繩といふ長秋記又始て見えて史より
字治拾遺盛衰記等に多く見えたり是も

公卿ハ昨着繩曰位以下片着繩あり軍器考に飾新を

引出せり昨の故又武家又用ゆると不なへて字を脱せり

片着繩あり色ハ紫村濃棟棟棟蕙芳續前黄

白款冬菊お交前黄お交藤お交青お

交等あり御襦白着繩と飾抄に見え

然るに保延元年四月加茂祭も白着繩あり

仁平元年十月廿三日臨時祭に舞人隆長の

申將も白着繩あり春日社に飾馬繩の

着繩も白一ふられハ御襦の時ときにも限かき

祢事になへて白着繩を用るにや加茂祭の

使風流のとき綾のお交を用ゆるよ

ちともあり物貝抄武家れ着繩ハ多く布にて

白淺黄緋之色のお交を用ゆ仕長さも

定りしる事もなきし殊に長きにむりてハ

十丈といへるものり大抵ハ一端の布と長め

まゝ六にさして二筋の料として白と淺黄

練とに深と右右右に組て毛を一つ、
 採てさまとあがり毛尋常れ美繩なりは美繩を
 さまさまやうに馬れ振りの髪のを結ひて
 其繩を尺幅りに手係たくりて右れ口方手又
 とめて繋るあがり馬より下りて引まるとさまに
 口方手又留ると放ちて右口に結ひて毛を
 以て引右口をハ手繩を銜にか搦めてひく
 なり毛を繋口を引緒口を引おとし年家物法

上手下手ともいふ 桃花蕊葉 東鑑 又後ハ引手

逆繩ともいふ 愚昧記 三議一統 みま毛美指繩なり此外に

引美繩かま美繩おとしもとり引美繩ハ

白毛を用ゆとしら後三年に畫も馬を

引いる繩ハ白く新新りしりこれ等の古き

ありハ智もいづより改りけん右の繋を

手繩を以て引車もなく替替の毛繩よて

引ことになりし智も改りて組の

陳れ太く長き又て右もを引く車に
なりて是れ今退還とハリふけの如く古き
車ともすたき約するにけこりの世まじ
差繩を差こと毎ひ起りてたましく毛を
用ひ車も出来しにや 軍器考神正

一 差繩の車 延嘉式 和名抄より見元す延嘉
式右馬寮式に御馬の鞍具の條に練絶
一丈二尺と有り 韁鞍の料細布一丈二尺と

有り考ると練絶ハ御手綱の料細布ハ
差繩あるへー又考る引く車にも韁鞍
付の細布と出されハ細布の韁鞍馬の差繩
ある車分明のやうに思はるれとも右目
取見たりー又江家次第又公卿以下ハ御馬
と給と接み接芻綱を引出して一匹半と
退出すと有りを公車根源駒牽の
條に公卿次第次第に給る馬ハ差繩を

取事沙前に進て一洋をとつり江蘇次を
徳ともつり盛衰記にハ養安口年一平
重盛大将洋賀のとき叶法住寺殿に
古馬給はり時重盛地下に下りて
繩を取二洋の後在中将知盛釣長に渡
とつり是等一字に書るも若繩大よる
ハ一着物語依濃も藤系陳忠長も藤
入る條に多く此人若繩とも取集めふに

つけけとおろりと見ええあり東鑑
盛衰記等に若繩の事而くに見えこり
勝り風流の美くきハ奴もかりよて武後
にハ用あり又若繩の事を若繩といふ衣
目もつるあり一色式約少博及長少書に
若繩さし繩ハ同車にハ馬よ若てハ志つ
なと中の流、若緋事とと用ひハ鎌若繩とハ
白布にておひなきもハ又寸法常は若繩と

同くさしつらり又細川家秘書にもあつたと
あり鎌倉繩の形を以て纏ひ結ぶられハ
光繩としふにあり又山鎌繩の形目ハ馬の
かま首へ懸て結ひた右に銜の鑿へ通して
口方へ出る故ハ鎌倉繩としふ俗語ありハ
漢に近し手繩指繩ハ別あるハ一上古ハ
公家の指風により武家と遠ハ意義を致し
由ハ武家の風もをのづかハ手繩ハ一繩

雜混お交りしとや今ハ京を以て武家
風官家風馬具仕立形つりて一極を以て
京都毎年の加茂八幡陣時祭勅使ハ馬具
又ハ煥学院行事清浄度の前駐ハ家風ハ
姿を以て馬具飾り更ハ仕立遠ハ官家ハ
車なれハ義風をうりにて武伎ハにハ飾り
由ハ古代ハ法量を知るハのハ馬繩ハ馬繩
手繩も同し車なり義やうに別あり

手繩てな式しき赤あか官くわん赤あか以も遠とほひありたたかかををああく
走をるる車くるまハハ車くるま陣ぢんののととききすするるありあり其その故ゆゑハ
勝かち多おほととくく秘ひ車くるまありありかかつつ色いろ又またかかちち色いろ也なり
いいふ

かちんとしし藍あゐにて深ふかく深ふかて練ねよよりも
稍しよここく深ふかてああままにありありししるるををいいふふあり
只ただのの赤あか深ふかいいんんちちううーーああととハハ勝かち色いろににハ
いいふふもも車くるま陣ぢんににハハ勝かちととししふふ車くるまをを目め出だすす

にに走をるる由よしハハ勝かち文ぶんをを用もちゆるるなりなりかかつついいろろととも
かかちちいいろろとともも云いふふととめめてて度たび名な目めなりなり藍あゐにに走をて
火ひをを防まぐぐものものゆゆへへ藍あゐををよよくくくく深ふか上うへでで
用もちゆるる車くるま火ひのの難がたををももささくくるる車くるまありあり
其その故ゆゑ又また藍あゐをを用もちゆるる下した同どう女め御ご馬ま具ぐ化け

一 毘沙門堂びさもんどう託たく沙さ鞍あな云いふふ手て繩な
後のち馬うまノノ手て繩な若わか々々繩な同どう引ひ美み繩な
飾かざ也なり云いふふ公こう卿けい所ところ美み繩な口くち位ゐ片かた美み繩な
古物宰相こぶつさうしやう中將殿ちゆうしやうてん ○

世ハ着繩をも分けてまゝ二とす馬頭又
かけて着るものを着る繩といふ羈の制衣
なり引着繩片着繩なるものに引着繩
との別有り菊ハ着繩の属蓋一引着繩
片着繩といふも公卿より少一の
遠あり

一 壽永元信範記 白着繩 引着繩 伴定記
永仁六年十月廿五日平文後藤芳隆白指繩

此ハ移に用ひる風流をり合くい

移の数に記す

一 移着繩或芋津緒或藤或棟棟續お交永
昌紀天治元年四月廿三日保勢保官御目也
左近少将友成忠隆朝臣泥障物覆輪
芋津緒指繩次冬議右言清督保通卿

同新

是ハ移に芋津緒の着繩を用ひるを

いふ今鏡に保安ぬ年

白川院の宴の事を記して由車に

緞の袴なといふ色の改もんなと一て

の輝やまへるあといふも物を阿芦津の結

なとにやより合せたる美文いあましすされる

なりあれのけなとれやうに金物のあさ

なとゆうくと飾さりと何こと常の常

なく輝やまへりとも記して又雅亮

装束抄に童装束の事を記して紫村濃の

縁の小指つらりに小指ゆびの小指なとにより小指

九月エ法もかりエ法何エ法とエ法もとエ法ゆエ法ひエ法のエ法紫エ法のエ法いとれ

うエ法名エ法をエ法もエ法いエ法つエ法のエ法きエ法にエ法すエ法るエ法ありエ法たエ法れエ法ふエ法とエ法縁エ法をエ法

阿芦津の結や芦津の結といふ結ありと結記結され結き結され結は結世

芦津緒繩といふもれ結紐結たるもの結は結ら

何とてより結合せ結るも結れ結そ結よ結とい結知る結か

一布結衣結靴結云結く結指結差結繩結ハ結交結白結濁結黄結ハ結ち結ん

之色ありたお右お二為を取合せて指なり
さしやう馬の振れ髪より之巻立て甲
きいよ首の骨喉の下にさしひつときれ
指ひに志つり胸の右れまきにたるむやと
に志つての根にたらし付るふりたるりの
次又引さし繩は率白差繩ありたをを
ふとさし不とさし指繩常れ布は一端を
六つにたちて之佐の繩二為にふるあり長さ

〇
此布とい三丈なり但し布一端の長さ二丈
又六尺に布一の長さも若しうらを次
引さし繩の事いさううあさくして布一端
を五つ割之為を以て之の折にさるなり
是ハ差繩を水干鞆に具しふる様なり
いせゆる茅津緒の粗なる物によりて
知るへし東鑑建久二年好尚に給ふ
公文所の送文に布のさし繩七首とあり

是なるへー今の世にハ引さー繩を
せとも^沟狗を造りて馬にかけ養繩ハ旅にハ
養ゆるやうに蒙れとも飾ハた々甲に
のみありて^ハ繩さーハる名まかり
なりけり之ヲ繩とも呼ぶなり

一 松系^カ盛^カ託^カ云く馬又繩ささと車白貴人
なり平人の抄文又赤きも青きも常の
さー繩又て養へー繩を二つに取て首の下

にて結びて^ハ端を^ハ支^ハ衝^ハれ^ハ柄^ハ金^ハに通^ハ
一筋つ^ハ前^ハの^ハ口^ハ方^ハ手^ハに^ハ留^ハへ^ハ一^ハ軍^ハ陣^ハの
後^ハあり^ハ烏^ハ帽子^ハ素^ハ袍^ハの^ハとき^ハハ^ハ馬^ハ又^ハ繩
ささとへー^ハを^ハ十^ハ徳^ハよ^ハて^ハハ^ハ若^ハ一^ハの^ハら^ハを^ハ
是ハ養^ハく^ハ繩^ハあり^ハされ^ハとも^ハ室^ハ所^ハ及^ハの
涉^ハ代^ハ式^ハ吏^ハの家^ハに^ハ引^ハ養^ハ繩^ハハ^ハ用^ハは^ハを^ハ
又^ハ口^ハ流^ハの^ハ者^ハの^ハ行^ハ松^ハ又^ハ養^ハハ^ハい^ハつ^ハ一^ハの^ハを^ハ繩^ハと
い^ハハ^ハ養^ハ指^ハ繩^ハハ^ハ威^ハ儀^ハ又^ハハ^ハ養^ハ侍^ハら^ハを^ハ都^ハに^ハ

強馬のよりの風情を重んじ柳も
せよと實を貴めり故^故又多寶堂後書及
紀され一文的年中此洋質れと此位
亂の装束等にも白糸繩ハ所きとて
着指繩ハあつるに公家方の此以松
北西此流口の武士の出立と同一
如くさりき室所及のとき始^始と
りよふハ一謙倉及以時代装束の

解風をうけて糸繩を返して口を
とれハ着指繩引着繩をハ^糸又
利ひぬ事なり一室所及の此時
また謙倉及此解風残りぬる^事
^{イキ}同^{イキ}ハ^{イキ}からぬや^{イキ}ハ^{イキ}引^{イキ}着
繩といふ名もなく着指繩もた^糸着
繩とのみ呼ひま^糸繩とのみ呼ひ
ぬれハ公武の分木もひやる^事

なり 以上安都馬具依

一 無名袋、赤糸に差繩、白村濃、打交、櫛
綵、蘇芳、綵、菊、打交、等也、公卿師差
繩、四位以下片差繩也、大治五年朝覲
行幸に、少將賴長、萌黃、白用、治兼元
年十二月行幸に、三位中將、款冬、用
天永三年春、詣中納言中將紫村
濃、用侍也。

乃字凡

負丈按、師差繩の師ハ訓を借り用ハ
なるなり實ハ雙の字又ハ諸の字
なり片差繩に對し、なる名なり

武器考證

一文治五年六月卅日、大庭平太景能者、為
武家古老、兵法存故実之間、故以被召
出之、被仰合奥列征伐事、御畧申狀、頗
御感、剩賜御厩御馬、置鞍小山七郎

朝光引立庭上、景能在縁、朝光取差繩
端投景能前、景能乍居請取之、令取郎
從、二品入御之後、景能招朝光賀云、吾老
老之上、保元合戰之時、被疵之後、不行步
進退、今雖拜領御馬、難下庭上之處、被
投繩思其芳志、直千金云、二品又感朝光
所為給云、東鑑

一 濂差繩ハ一棟又惣ふなり紫、用於

あるハ——室町家の書又紫ハ御所極
ちらては惣ふせうれぬ事なり、
人の淺黄系縁ハ赤交ふと志るハ——
と騎射の書又も出小り紅ハ過色たる
ハ老人少人の志るハ——とそ世濂
差繩ハ小笠原武田大坪流とも又用
ゆる事なり義家公の秘事又あそ
はれ、
單致む禮の傳の用とも入られし

繩なり 馭馬大元記

一 繩の事常には白糸淡黄之糸なり
軍陣には毛を後元かまきし繩といふなり
地ハ布なり長さ二丈八尺右へ打つ
引馬にも毛をさして引なり軍陣に
色白きを用ゆ又黄きをうつさとして
用ひ貴人の白きを用ひ平人の黄きを
を用ひ或ハ平人の赤交をも用ふるなり

長さ之尋尺寸ともいふ 単用記

一 戎雜記曰く陣中にてハ白法元き糸を
用ひ法元毛れを法元いさし繩と法元中法元併法元勢
貞丈曰く馬のうま首ふおろくる糸繩
由へ鎌着繩といふ強馬や破おろして強け
出さとき衝をはみたると時はも毛を
引とむるなり世繩を引けハ馬の咽一
まるゆへ止るなり。麻具一箇

一八廻日記云く軍陣の糸繩たきりのきりなりなのきり
やうくつじ銜のくぬのらん銜又糸繩を通
してさして例武のむ如くか甲うきいよてむ統す
ひてさくあふれは緒糸又結ふなり
また一方に取てもとむ返るなり由流の
糸繩のきりやうとして別又ハなきよ
なり
伊勢赤彦存書
下同

一弓馬秘説云くか漢拈ま漢拈きり糸繩ハ馬の衣

より二重ふりなりた投な投け投こ咽てのとの下
よてむ統ま統ひ統緩統う統き統方統ふ統て統引統め統長統き統方統を
二つなうう輪の中へ一つ支方へ引通して
らつじの十文字のく銜らん銜又外と外より引
通して又それを今の繩のそ外と外つと外う外へ
もつれさるさやうさよさしては緒糸又二重外引
通して其を一むま外ひ外結外ひ外てとむ外へ
又云くか漢拈ま漢拈きり漢拈な漢拈ま漢拈を漢拈か漢拈も漢拈きり漢拈繩漢拈とも

いふ但一化流の唱へなり

一弓法私書云く馬のかまき一繩のきりやう
の車さ一繩のま^まん申を二つよ取てる此
たより首へお懸て下^首くび^首よて男むまひ
よ依ひて^{身丈}身丈云くは男むまひハ^まま折^ままけ^ま
つ不^まつき一繩の端を雙方なうう入て引
通一て鞍のた右の口方へ引通一て
男依ひよ二つも三つも依ひてとむ^まなるなり

おと^いいの下よて依おつはの長さ一^まの
米よするなりさ一繩の引^まつめ^まやうハ馬の水を
こ^んろ^んや^んま^んのむ^まは^まと^まに^ます^まハ一又^ま
一繩を^まら^まつ^まの^ま銀へ通一^まら^まる^ま合
のよ一^ま小^ま笠^ま系^ま八^ま布^まも^まり^まさ^まる^まなり^ま毛^まハ
よ^まる^まへ^まき^ま車^まふ^まて^ま尤^ま不^ま審^まハ^ま身^ま繩^まの^ま車^まなり
身^ま丈^ま云^まく^ま折^まま^まけ^まら^まる^まつ^まは^まと^まハ^まき^ま
繩を二つよ折て折^まを^まれ^まハ^ま一^ま方^まよ^まま^まあり

それ以上なの所を^以つて一方と取合て男
結ひ又まこれハつは出来るなり

一又云く^{徳瓦}繩の長さ一丈八尺なり
但し大馬などには繩一それよりも長く
すべし

貞丈云く着繩布一幅を六^別尺り^別
又裁き之つを^経ひて之つくりの^別尺なり
するなり

一的出張籠又云くたな^別の車赤く^別
するなり^別好みによるへし一但し軍陣の
時ハ^別暑くするなり

一くろがね^別の繩ハ^別用ひてよし又^別
鞭を付て用ひ上^別の繩ハ^別化粧^別の繩なり
それ又^別襪を付るハ^別一^別下^別の繩又^別
くねの^別の繩を^別掛^別る^別より^別強^別き^別馬^別
ハ^別又^別時^別ひ^別ぬ^別い^別き^別時^別も^別ハ^別の^別ま^別よ^別ぬ^別る^別也

のとなり
竹中百箇條

一 圖本紀に云くたなひの事お交本なり白馬

あさき^{浅き}之色いさへ^{浅き}世ときい布又てするなり

又草を染ていろくふいろ^{いろ}をする事略儀

なり但し白と黒とを用ひ来いさふ子細

あり 伊勢家座右書

一 弓法聞書^{多賀宮}曰く馬をい子繩をさして引

出す事本なり馬く^狂つな^狂ぬ^狂る人もと^共

又引てま^理いさへ^理一^{既具}

一 大退物政清紀云くあがり馬又ハ繩をさすへ

一 暖帯又繩をへて引通し^強ひ付け前足二つ

のちよとりて^銜つ^指ふ^指からむなりつよ^強くつめ

比へハ先へ馬ころぶなり^然あ^然る^然へ^然き^然は^然と^然に^然す^然へ

き^大より 伊勢家坐右書
下同

一 上賢抄云く色装の次第^{中畧}貞丈云く是ハ^{大將}東山殿

出立を^{出立}起^起し^起子繩ハ白き布又て三^糸なり又^打なり

一式雜記云く手繩の車むくくハ白青黒之色
之^り又仕^の近代赤を用ひ^比

一射所持長記云く馬を^手繩を^さして引出すと
車本燬なり馬^くる^つ尻^取とも^に例^式の如く
引^{なり}に^結遠^る馬^よい^手繩を^さ
一^尻繩を^取へ^き車^{なり}手^繩取^やう
右^を手^繩り^て持^て右^の手^にハ^逆又
執^へき^{なり}返^くも^け條^も常^又ある

車といへとも^能た^るひ^知る者^稀よ^も
なき^{なり}

一笠敷日記云く手繩ハ白^河は^浅味^を
用ひ^比赤^手繩ハ人^又よ^るつ^くい^むさ^るハ
公^方掾^法用ひ^比

一扇鏡云く^志人^網ハ^子れ^び平^首の^き
雨^{まで}引^また^す時^はと^り片^眼を^らり^紫
草^よて^くる^{なり}銀^のう^ぬ又^通す^{なり}

志人綱取やう右の手又繩のきききをと
輪ふしてたのきをさし出してさき
又取つてさき又かきむかひやう又成つて
負ふてくむき一日き一ひらのきかたなり

一弓馬故實なく手繩さし板の車ひつは
なり先斬のきみききつ通してそれを
平首ふむすつてをみききのかもひ
かひのかも何れもひつときむかひたなり

むきふつて馬強けれ二物もさすつて
何れもさす又向ふやう又引へる友の方の
尻尾をさす引者ハたのきまきつては
なしてたよて手繩の目なよむやう又引
つて右の方れをさす引者ハ右のきを
先へさし出してたのきよとさのあるやう
又引つてけのぬくむかひあひて引たり

以上伊勢家坐右書

一 軍陣の繩長さの事
繩長さのひら
片寸片く又一月五寸つ又須を入る
一 軍用心得記

一 用害耗又云くかもさーなるもの長さ
一 丈二尺なり
伊勢家座右書
下同

一 馬具寸法記云く繩の寸法の事長さ
五尺五分なり
同
馬具寸法記
下同
一 さーなるもの寸法二丈一尺なり
おとこ

八分又すへきなり
馬具寸法記
下同

一 たなるもの寸法二丈八尺なり
右たへうの
一 同出

一 弓法私書云く志つたの長さハ一丈八尺
然るへきなり
伊勢家坐右書

三尺繩

一 三尺繩ハ銜を馬よまをひきせまき為なり草を
之くりりなうても用由又合せ草よても
まをたより又草を以て草繩を縫くもみふ

まをたより 一己持用集
竹中百箇條

杭

一 掛やうハ一の髪より二つ目よかけて腕の下まで依
ひてまをを銜又付てぬるたより上の小紐をの
面裁のかうけよ依付る安都馬具帳

一 三尺繩



末緒
三尺三寸ハカリ
太サ徑二分
ホトニツヒ

蛇口一寸

繩長二尺五寸
蛇口末緒ヲ除

太サ徑六分ハカリ
太キ所ニテ

カウカケ緒長七寸ハカリ

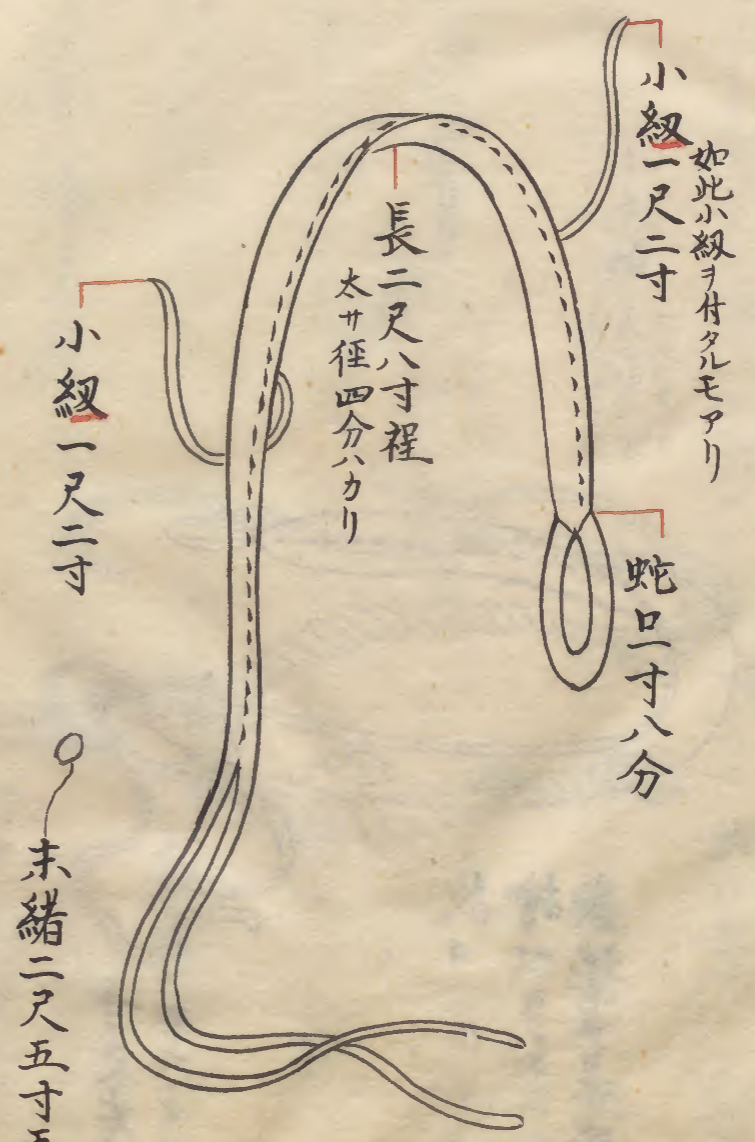
一 平草三尺繩



寸尺右ニ准シテ
知ヘシ

紋ヲ付ルモアリ
繪ヤウヲスルモアリ
無地モアリ好次等也

一 草縫掛三尺繩 フスへ皮ナトヲ用ユ



末緒二尺五寸五分程

江ノ下御馬具所
自子

一 平草三又

一 三尺繩ハ甲小掛咽の下又ハ又繩一物を
蛇口へ通し右右の蟹揃又掛ておこ裏へ
おり元の蛇口のわらみたる変へ引掛て
振るゆるくして並くへ一息合に陵る
なり 騎士用本

一 之尺繩をハ一掛と云又一名ともいふ色ハ
金箔を並又ハ栗色青漆好み又まっす
へ一平草又ハたる又ハ表の紋を付る事也

有へー繪きやう多く好み次第なり 安都馬具依

一 三尺繩馬を御する人の必用なり不意又

驚走しぞつ一 鯨を脱せまりきたための利なり

丈母へ庭系なとよハ三尺繩をハ用ひま

諸家の使者なと多門装束の騎馬の

とけとよハ主人の相布の紋を付又まりハ馬

なと而持の式家ハ着繩を用ひる人も

有り又用ひぬ人もありもと驚走を拒く

具なれハ紫馬ハ用ひぬ人も多一ハ薄あり

へき車たより 安都馬具依 騎士用本

一 今の三尺繩といふもの古への物又見えま

鞆ハ絡頸繩也と注せるハ世物なりといふ

人何れと依とも思われま 本朝武林原始

一 三尺繩といふものも近き世に彼え一見ハ

もと着繩を以て振ふりの髪をくりり一

形の残れるなりされハ着繩をさき車れ

廢れるより記り〜なるへ〜其遺風
にて始ハ三天繩と追繩とハ色を同〜く
まを法なりなといひ〜それさへも今
走赤いれて赤草を心て造れるも何りて
以の分れ事ハハなり〜り 單畧考補正

卷之四十九

五十八
器具

十月四日
淨虫
佐之
佐之
昌
三

卷之五十八
目録

馬誌卷之五十八^{四十九}目録

器具部

厩具

施裝

馬誌卷之五十八 四十九

器具部

厩具

一昔馬寮の淨厩の事いふは武家
の厩の制古へい定まれる法をいひける
其中一の厩二の厩ありといふありさう
入る口のありきといふ一の厩といひ奥の
とまうといふ二の厩といふ厩といふと

奥とと上等寺とす凡厩よ七つの懸物
とりふわり馬梳馬刷竹刀爪打刀爪打
槌^{つち}鞆^{たもと}通繩^{とじな}藥筒^{なぐさ}とりふありこれらの
物も各定まれる法量あるあり此外
剪刀^{さきみ}燒印^{やういん}粥袋^{かゆふくろ}槽^{まなね}到^{くさき}薙^{かみ}寺の類猶
多し

粥袋亦ひくつとりふ萬葉の歌ふ
くつとりふあり抄にくつとりふ

細く繩と持物といふ物よして
田舎^{いんが}のものを持つありとり
眞皮とりふもの倭名抄に見えす
條の字と用ふへいありとりふ人あり
倭名抄に條の字と久依利とよみて
唐韻の革響ありとりふ鏡と毛袴
注し條の金とひて小環とあり鏡と
纏搔するものありとりふ鏡と引たり

革轡とりのひ金をとひて小環とす。ふと
りふ事今りふ鼻皮の製に似る所も
あれり新か、いふるあるへ、これと轡と
りふに馬と御する革よて今の手綱
やうのものあり、條の字も待ふ凡そ
ふたひ出つ毛氏鄭氏のほ一定せず
異朝の人もたゞ郭璞ういさゆる轡
の把とらりの外餘りありて、送きこる

先と革とりのひ條皮よてつ送くれる物
あれり、是と條革とりのひ、送けるを
らそら、送すれ又條とひてする
と轡といひ革とひてするを條といふ
とも見え、えううううう條といふもの
革にて作れる手綱の手ふとる所の
餘りにて鼻皮ふとりの物、送はつと
説文の勒の字のほ、馬頭と銜と終ふ

あり又銜あると勒といひたりきと
羈といふとんえふれの銜あて馬の
頭と終ふべきものい今の鼻皮の類
そあるとれと凡我朝の物ともあふち
に異朝の文字借り用ひんとすれい
似て似ぬ事の多くあれは我朝
よて世に用い來るまゝに記ある
ふんう類をこに又強綱といふもの

と他の字を用へしや廣韻の較系あり
増韻に又馬韁又長繩也と注たり
一 凡傳に羈繩といひし鼻皮強
綱の類よそあるべき繩に繫馬索也
あと注せし物もあるあり古今類
書纂要足懸
とりふものい倭名抄に絆と書て保太
之と後あるものよや羈馬の馬絆足也
と見えふれの此字とも用ふへしや馬

の字又執系にも作る 本朝軍器考

一昔の厩又一の厩二の厩といふ事馬寮
の所厩の事いふとす軍器考
あれとも

後白河院の仙洞にて^宮らせ給ふ事
河越小太郎時房う奉りける馬と一
の所厩にまゝれ河越忠とめられ事
あり 平家 孫又永延のころり徳叔七草を

徳叔カ一鶴毛といへるも 今集著寮の所厩
の次第と^教かそへて唱へる名よてとある
へそ長下の厩も

元正天皇の所時官位によりて教と定め
られてる厩も教に意一二三といひ
しあるへし武家の厩むうしに定りし
教もありし七間の所厩は公方の所厩
より限るあり公官領を介いぬ間ありとも

各馬の數より従ひ刷。梳。剉。麻。籠。頭。と
備てともに通すと見え又之儀一梳
小刷の長いところ九寸梳の齒の長二寸
八分數九つ又十と十めにもすへ
爪打刀長九寸二分廣三寸一分爪打梳
頭の方九寸二分長二寸一分柄の
長九寸八分ありといへり勒通繩。
藥筒。副。藥。の。こ。つ。ハ。此。ハ。古。き。も。の。に

見えたりる。や馬刀と。り。ハ。則。ち。大
諸。禮。に。竹。刀。の。寸。法。二。尺。七。寸。め。分。又。ハ。こ
ろ。一。寸。め。分。にも。す。る。を。り。と。き。こ。み。ひ
軍。ハ。畧。儀。を。り。と。見。え。一。此。竹。刀。と
馬。刀。と。同。物。よ。て。刷。と。い。ふ。も。の。の。事
ある。へ。一。然。る。に。軍。畧。考。よ。七。つ。の。中。に
馬。刷。と。竹。刀。と。並。へ。出。て。い。い。く
覺。來。ふ。一

竹刀といふもの、往古より産所の具
にい見え、れとも、既の具より舊く
い見え、す、後世の名なるへ

七つの印、剪刀、焼印、粥袋、槽、到、北、雜、等
の類、猶、多、く、一、と、軍、器、考、又、記、せ、し、中
小、剪刀、といふもの、志、る、る、へ、こ、もの、に
注、せ、し、と、見、す、焼、印、の、昔、又、必、ら、す、用、ひ、
もの、~~記、す~~、粥袋、一、と、記、す、粥袋、と

いふも萬葉集に

いふ、^タお、^タお、れ、の、み、つ、の、^{紫、女}お、ま、め、の、之、具、澤、も、て

玉、藻、^紫か、^紫る、^紫らん、い、さ、り、て、み、ん

又、清、少、納、言、枕、草、紙、に、さ、う、も、て、る、物、と
い、ふ、中、に、さ、う、つ、の、こ、う、さ、う、り、と、あ、る
さ、う、さ、う、つ、と、い、ふ、もの、の、^紫葉、よ、て、^紫糸、の
や、う、に、^紫あ、^紫み、^紫つ、る、もの、の、^紫あ、り、と、^紫神、^紫申、抄
に、見、え、し、後、又、是、に、^紫馬、^紫草、と、入、て

彌帑といひ或いひらつとりよひらつ
いらつつの記するふるへし槽と到薙
^の延喜式に到し槽ハ十匹よ一口を充
槽ハ方一丈深二尺と注せり和名抄に
も唐韻を引て槽ハ馬槽なり和名舟
と同一到薙ハ和名くら依波利と見え
て古き世よ字えしものふるに此二つ
いうてり七つの中とを^世れふるよや鼻
皮とりよもの古へに見えす今の鼻皮
とりよへき物を面懸にとへて^世かけふる
圖後三年の跋の畫にたつし一不見えたる
昔こし繩を用ひし世よ陣申あまに
鼻皮の用なきものによ此文書の事軍
器考に委し注して異朝の文字を
借用んとすれり似て似ぬ事の多く
あれいたつ我朝にて世に用ひ来とれる

まゝに記しあんな煩あきよやとほせ
らねし確論あるへし又張細い文字の
まゝにまゝつあひの畧語あり和名抄に
胃索の辨色立成と引て馬と取縄あり
和名加ぬ糸波といへる物よりやま懸と
いふものを割り同しうもぬも絆といふ
物と同じうるへし和名抄に釋名を引
て絆の半あり半の行しめて自縦
ふる古つらとを得しむ和名保太之
とほせり又と取の下部あきし取にて
馬の動き走りぬ古しとて糸取を
しと並といま芝繫といふ昔の舎人あ
しと結ふといひける物皆又今の世は馬柄
柄といふありて厩までも卯までも馬の
口と濡に是を以てす蒼くも柄長柄と
いふあり馬の口付の力者是を持それ

紙後布と一尺二寸に裁て柄に付るあらいひ
にていりける鎌倉年後二年の戦畫法
然上人傳の畫ともにか者あるもの
柄長柄持つるを畫き柄に白き布付
つるも見えつり鼻捻とり人物も古き
せよも見えし鎌倉右大将家淨祥賀
ありし時の居飼をと持しと東鑑
に見えつり軍器考補正

一 凡馬底板者廣一尺厚六寸長一丈一尺匹
別十枚櫃長一丈六尺以一艘充二匹凡馬
水桶あひき杖あひき及炬松寮斟量儲充延喜式
一 諸書當用抄云く殿中凡馬を日常の用
と此對面而との間に之間の凡馬をあり
東の凡馬の前に西むきよ十一間の凡馬を
あり上二間にあるあり廊下つきあり
けさやう腹かけとして手繩の如くうち

ませてふらふら一たんちうりにいたるあの
揚と黒皮よてゆいて腹かけよまるとい
付て並あり是を馬よつせいの事にあし
わらうけもあくて夜の細き手繩と
つせいの色いぬ馬色の者さきにつくをい
あうり杖とふちとさうり柄杓ひたやくとそ
に並き馬よ向て居いあり馬師馬師あ
人支配いこしあありさうつあいの者革

さうつあ柄杓さうつあいの麻かり

右に馬屋とりよの室町將軍家の馬
屋の事とりよあり 武器考證

一馬柄杓の柄と似て猪へ陣中にて酒編

よも用のへ 軍法叢書集

為早
柄杓

一柄馬柄杓の浪板と一柄を指え並權の因と兼をもつ一掃一得

右に好く用之 武学拾粹

右手にえささうよ持つる染又圖 馬書板

まうせてふらふら一たんちゆうにいたるあのみ

襦と黒皮よてゆいて腹かけよまうとい

付て並あり是を馬ようせい車にあしを

わらわらけもあくて夜の細き手縄と

うせひまの馬屋の者さきにつくまひ

あうり杖とふちとまうり柄杓ひまやくとま

にまき馬よ向て居ありあし田舎あ

人支配しこしあありまうつあはる者草

まうつあ根あまうつあはる麻やうり

右の馬屋とりよの室町將軍家の馬

屋の車とりよあり 武器考證

一馬柄杓の柄と付て橋へ陣甲にて酒漏

一柄長杓これい氏家行旅の具あり後二

年の繪巻物帰陣のあし馬副の男

右手にまうまうり持する装束圖馬書板

馬書板

一 地巻老深衣のり一 此の馬書板の図は馬のり一 馬一 馬

一 鎌倉年中行事よそく 公方極家は發向

公方極家は臨に此番の役以下供奉の人々

を數と知らず依て此加者方者或は十人或は

八人又は六人何れも出長長路路巾巾と冠り

白きまゝ袍に染ぐるも小袴と引ひききて太刀

とさくさく兄部兄部は此長刀と持二番目の

此刀者は長柄物と持長刀は左長瓢瓢は右也

柄ヒサコの柄柄は腰腰はさとして柄口の金物に

とち金と打。然後布一幅よて包み柄と

も巻くへ中その内と長一尺二寸思及よて

結び切て下下け下は下は下復ふと踏次よて水と

飲飲 掬掬んとときと水と掬掬んんためあり○これ

馬具よにああこれとも平和の姿お

従ひ馬に水飼物と靴車靴車指りつれい

柄長柄よにああねとも馬柄柄は柄此物

の屬屬ありととりりりり馬柄柄の柄事ハ

よそく

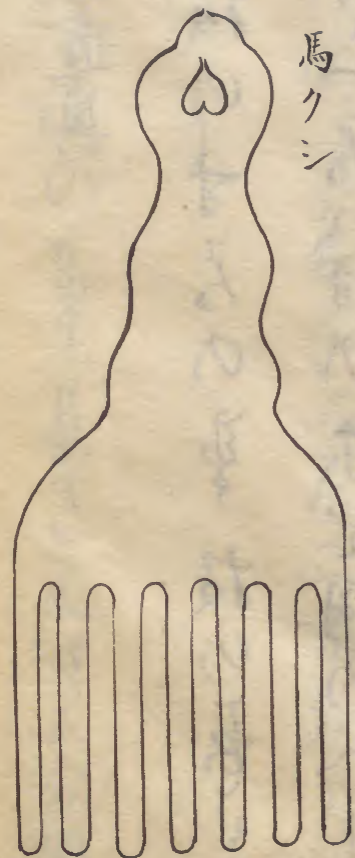
物に見ゆる事あるへけれともい未ま
考へす又後之年の圖より布と持たる
姿の見えす後振ふるへし 同上

一馬具寸法法量物の事 詠正十七
三十七日 ○爪打刀

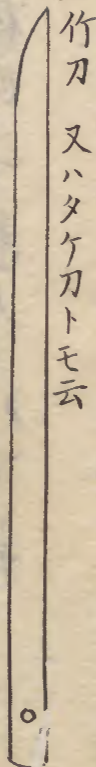
七寸ひら二寸柄九寸 ○同板二寸二分厚
柄の分七寸 ○同板二寸二分厚一尺五分
厚さ一寸二分 ○竹刀二尺五分厚さ一尺五分
の定まゝす ○薬筒一尺二寸五分厚さ一尺五分

尺寸二分 ○馬船長二尺五分厚さ一尺七分
深さ一尺二分厚さ八分 ○すりひしや
く柄ありあり七寸深さ八寸五分 ○
縄拂柄二尺七寸馬の毛の分二尺計
○ねころうき二枚伏草にこれと用ゆ二枚
と一間にこれと用ゆ ○右大概此を定む
法儀にこれあり

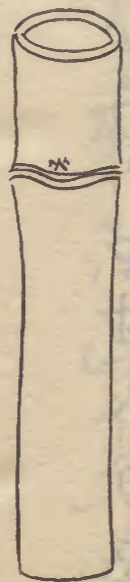
は内書引付



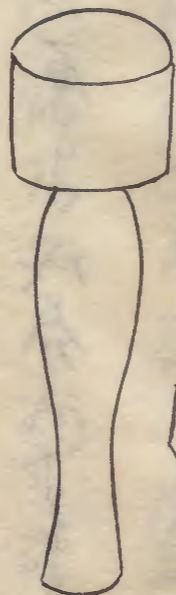
馬クシ



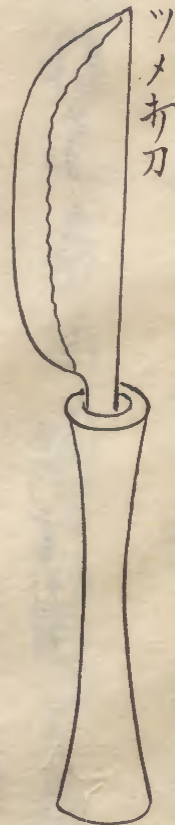
竹刀 又ハタケカトモ云



クスリツ



ツメウケツケ



ツメホリ刀

ツメホリ板



一 既之十之道具

つめ打板の寸法の事板の長さ二尺

めす廣さ一尺八寸の木と用ひへ

つめうち櫃の寸どり八寸長さ一尺二寸櫃

のかし二寸め分を下よ一寸並て竹のふ

とすへ

つめうち刀の長さ四寸め分廣さ一寸

め分をり柄は寸にすへ

重さ一ひの寸七寸あり又さきこ

ひら平く削けつり木よ山うつ木と

用へさあり

身さけ刀の寸二尺八寸ありと取て

竹を削り緒と付へ

さありりの寸長さ一尺二寸あり廣さ

二寸め分をり

くしの寸法の事長さ二寸二分柄は四寸

あり合せて七寸二分廣さこ寸め分あり
^{七寸}と七つ角へ

わうささみの寸法の事長さ九寸廣さ
八分よすへきあり又あすめ分よ^{七寸}と角

へ
ささあさの寸法は二丈一尺なり太き
八分にすへきあり

たあさの寸は二丈八尺あり左右へうつへ
手細の寸法の事長さめらこ分あり

ま^{七寸}ら^{七寸}おいの長さいお尺よすへきあり

尾ふくらの寸長さいお尺め分とを得へき
なり

あ^{七寸}い^{七寸}ひあさの寸は長さ七尺あり是
おその緒の長さ同寸あり

あしたの長さい九寸ありその廣さ
寸二分にすへきあり

きせきぬの寸法の事、こら八寸^布乃^布
ふつ^續けてぬ^縫ふ^縫き^縫を^縫

こらあての寸法の長さこらめすあり是
二乃^布にすへ^へし^しく^くあ^あひ^ひに^にめ^めら^らめ^めす^すよ
す^すこ^こめ^めあり

せよこらの寸法の事、長さこらめす
あり^{あり}、廣さこら八寸あり

ひさこの分量の事、廻りこらめす、深さ
八寸あり、柄の長さこら八寸あり

す^蠅い^いこ^こら^らひ^ひの^の長^長さ^さこ^こら^ら一^一寸^寸あり、柄
の長さこらめすあり

馬をふちの長さこらめ分よ切て持へ。
くらりけの長さこら八分あり、長さこ

同^同く^くこ^こら^らあり
くらさおの長さこら七分めす、うの布こよ

同く此内より、糸筒と切るといふ事あり。

葉^カのす^カりつ^カのす^カふ^カと^カこ^カめ^カて^カき^カる^カへ^カ
 ふ^カし^カら^カう^カ上^カの^カ薬^カの^カい^カら^カと^カい^カは^カす^カこ^カ分^カに
 切^カへ^カ下^カと^カい^カち^カす^カに^カ切^カへ^カき^カあ^カり^カ又^カ七^カ寸^カ
 にも^カき^カる^カあ^カり^カ
 くら^カま^カけ^カつ^カえ^カの^カ寸^カ法^カの^カ半^カ長^カと^カい^カら
 八^カ寸^カあ^カり^カあ^カり^カ七^カ寸^カに^カけ^カつ^カる^カへ^カ
 か^カね^カの^カ長^カと^カい^カ九^カ寸^カあ^カ分^カあ^カり^カう^カね^カの^カ寸^カ法^カを^カ
 口^カ分^カに^カい^カら^カり^カて^カ持^カへ^カと^カい^カあ^カり^カ
 う^カわ^カき^カう^カね^カの^カ分^カ量^カい^カき^カと^カい^カひ^カら^カ
 厚^カと^カい^カ分^カ廣^カさ^カ七^カ分^カあ^カり^カ長^カと^カい^カ九^カ寸^カあ^カ分^カ
 なる^カへ^カ
 曲^カり^カう^カね^カの^カ寸^カ法^カい^カき^カの^カ寸^カあ^カり^カま^カり^カ
 の^カ下^カに^カ八^カ寸^カあ^カす^カへ^カき^カあ^カり^カ
 ち^カう^カら^カう^カね^カの^カ長^カと^カい^カ二^カ分^カ八^カ寸^カあ^カり^カ廣^カさ^カ
 一^カ寸^カあ^カ分^カ成^カへ^カ
 ひ^カん^カと^カう^カす^カり^カの^カか^カた^カの^カ長^カと^カい^カ四^カ寸^カなり^カ

廣さ二寸二分あり

てんとうの長さ一尺七寸二分なり

馬ふねの長さ一尺九寸ありせきさ一尺

二寸あり深さ八寸あり

とちうねの寸法は七寸二分あり太さ

一寸あり板より一尺五寸あけてつけ

事へきあり

此の寸法と器具とをばへて用ゑるへき

あり少くも異なる儀あれ馬は類い

出来るあり惣して道具の内いづれの

器具ありとも器よく造りゆふ寸法と

もれてはその馬よといて疝病とくく

といへり又疝病の馬ありとも寸法の

道具とほて馬とあつ板りりいうて病

お起らるへきや惣して相懸の道具とい

用のへきす 馬具寸法記

一 如きはつあひの長は二寸八寸あり 用害祀

一 的如張記云く馬とるとの間はある板と

きぬうけとも又間の板とも中の間板

といやすい陳は云く寸五

一 馬具寸法記云くあうけの長は二寸六寸

横は二寸二寸同はん七つ又九つあり

一 又云く馬具の間の七寸あつてありとあ

うぬ柱の面八寸二分めんともらすとち

うぬと折板一う一う八寸に折あり

一 又云くさうさうかけも持つせのくさうさ平

の厚寸二分にて長は二寸八寸その間一う寸

なり 以上伊勢家坐右之書

一 馬の尻とすすものとも枝といふる

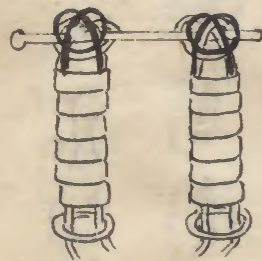
又現あり一うさうとりよへ一又持ふに

あてし尻と計るものといふ分あり

なり 好玄記

施装

一 一番鞍の追城多居革傳うてら〜皮の
鹿皮よてもみ革とら〜す幅二三分
餘りたうり是とに不共に假り拵りに
てとる取付持付勝付結留の罎よとる
よしてとる居とら〜このこら〜



此餘リタル皮ヲ穴へ
ヲシ挟ムナリ

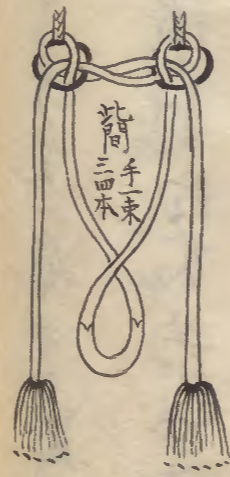
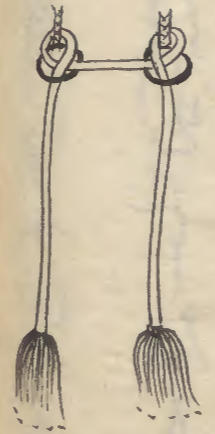
まうつ居木切組の彌完へ皮のあぢと左
右へ通し後端の切組の下の口の完
のあるまゝと左の完へ左右の皮とささ
通し引出し一筋の籠子股尻挿し
て一筋の糸の如く向の笠木皮に掛る
をう掛やうししり掛て引出柱皮の
上と^裁らさし此方の下より向へ出して
端にありたる申へ通し引おめ糸の
^らら^らくまき^り掛^りむあり此方より
固くあるをう

一 二番に方子の前端の口方子通し一の完
へ通し居木の口方子^りのみの完まで
先より^りして居木へ一筋通し^り結び
結びて強しす引替す法螺^り又の逆
掛晴蛉結びに括る後端の方の通し
一 結び結びをめて留方の前に同し

一之番切舟肌付と鞍には付るよの幅八九
 寸のもみ革とをわめ緒毎一の完口不
 共に毎一左右前後共に仕付くる皮と
 渦孔に毎一前の左右の緒は各一とを
 て後の左右の緒は手の指の中節を一
 雙に折る毛と切舟と鞍との間へ入れ
 緒と引上げ括る大糸此のねよて鞍と
 切舟の間一寸とありす透あり毛よて
 馬脊にくひつきく痛まぬありとて
 を引出たる緒と何れ共一結びつ
 結いてくるなり夫と前後の惣緒先と
 括り居末間へ入るあり印に糸とあれ
 ともより^互す此箇一段より又
 前の前と一結びむすひくうて後も新
 の如くして夫と前後と括り合はも
 あり

一 口番板馬繩力革と仕掛るよゝ馬繩の
 耳皮の所へ力革と縫一鞍の力革を丁
 の穴へ縫一等分に分けて縫一
 皮表の方へ出るなり

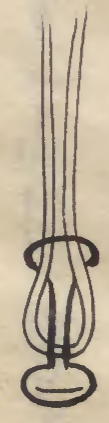
一 ぬ番胸絨と仕掛るよつほの方の内あり
 尻絨ハ左右と縫一並なり



両蹴上ケトモ
 後輪ノ後ニテ
 花結ニスルナリ

一 七番腹帯ハ銀付のこまかより内へ出る
 やうに縫一仕掛る二筋の股繩と長
 きこ方の腹帯縫一の穴より下へ縫一
 口寸革にも縫一並なり

一 七番障泥ハ切付と肌付との別一扶む
 たり紐の糸の方の竹の節留する
 まつ障泥に紐
 口下とも縫一糸の方の口下へ



糸の如く

二筋共一集よ毎一紐と右右へ分て
取り一つ結び残す引出さす長き
方と又曲けてまゝあへ入るあゝの紐と引
あめる形の如く二つあつほき一て
一筋と二筋分に分あめ二筋にあると左
の手よ持て大指とのへて又二筋の紐に
て二つあつほき大指と接して端へ巻く餘り
の紐と曲て引毎一あめを引あつほきを
竹の節より引後紐の四方手に毎二す
後端の後へあて花結び又結び是を
馬の上へお上げて障泥と切付巾へ入れ
前の紐と竹の節に留るなり又速鞍
に引さし一巻の糸で付掛糸引あつほき後
紐も四方手に毎一後端の後へにて竹
の節に結び是くも物よ掛さす一て
引一又前紐と前端の鯨口へ毎一追

掛として一つつみ摺付摺もあり徳と引
ぬすずありれむむあり障泥の軍中
にあくてもうき品ありといふ

一 八番内の方の轡と掛るより酒の形と
持ち楯胸と上の方へして舌先と馬の
尻尻の方へ向け有有業も手前の方にして
力革力革 鞍具頭の方へ通して志あり完と轡
約の完と通して引ける通るも志あり
長短の糸子のうきよは後小供一長と
うき足とふんふん業とするにもより
お口の轡の掛やうも右の例なり

一 九番連鞍にいたし通の胸掛と前輪に
巻つけ徳先と馬轡の下は挟み通尻
掛もまたふの交と馬轡の下は挟むあり
轡の鞍の上へ左右やり違へ通障泥の
糸へあり腹帯よて引志ほり鞍の上

よて括り並なり

一 留の贅り又ハ勝付又付てもより

一 結頸の銜の引手に手綱と付管結よまうらのまき

と付まき面に絨と付るあり

一 鞍と馬脊に並くよまの考とつけ内の

方より向ひ馬脊に裁せ前つうす後つう

す鞍下居費よ社よりよまて腹帯

と解と障泥とつけて贅と右左へ卸

尾とたるね尾筒の上と一つ二つた

と尾と上るあり別ち尻絨とかけ尻絨

とら頭の肉上と手一糸布と入る位

てより加減は方手にあめて花結ひお

まるあり胸絨も餘りひき附るやうに

してよりあま徳付の紐と下より一

結ひ結ひて餘りたみみて又幅み結

並ありさて腹帯と志めるありられと

下より取り肩口のつ布に縫い結ぶ残
らす引返す事ふれはらの貝の理
にて結ぶ事うて亦手よは解るを得らる
へしぬにゆるくすへし息合を事あり
まうらら繩小申繩用ゆへし

一傳に洗銜仕掛てある馬よ事銜掛るとき
に洗銜のをみゆのふらう事銜のをみ
といれ掛らきやうよして洗銜とあるあり

一立具舟けの馬よ鼻皮の下より面補と
毎し海みと事うせらきやうに立具と
さつすあり新の如くすれの危き事
あきかり

一打糸袋のこつの山よ付るあ方の紐よて
勝負と取付よ附る又後痛の下の方へ入
るもようし二つにしたる袋は弦西復の
やうよ付る

一 小中間繩の卯口の蟹輪に蛇口の石を栓
とさす結びより結び甲より取れし内
口の如にまた引返し右の糸綱を結する
糸綱よりたるませ持躰驕のとき引
附て持添るあり

一 沓打やうは方儀あり一沓是の紐とあり
小付るうらうら二つは折てその甲より一筋の
紐と附て括れりあるうらうらぬものあり

一 腹當の緒は口の方の根緒に附るなり
一 口割の口の痛まぬやうにすへ一軍中
にいらぬものあり

一 立具の首掛と耳の後へ掛鼻皮と鼻梁
にうけ小紐とあり裏より取括る下の小紐
と小をせよ紐一垂けぬれ渡るとき解
やましりあり

一 助飼い代名持飼料と一つありて製するも

あり又にかますよ志たるもあり又沙金
色の袋形にするもあり

一背當ごらさり鞍すれ致さぬたあありたさ
鞍さ愈し尻の方を丸くしてらし前の
方にあすつこの縄と二つ付る是よて口方
手の根緒よくくくるをり腹當もつごらし
雨雪泥土と防くへし口角よ縄を付る
あり餘りたさよすへしすよの申と

こ口下よせてくふる砂石汗等ぬけて
らしごらさの皆琉球こらさをらし

一首楯鼻革の柔らうなるうらし

一立縄草の目物こらした文と長口尋ま
あすへし下付縄のこらあすよして鞆こしせけ
らし

一若張縄の目物こら一貫百目長さ九尋あり

一腰縄の目物こら二十六文あ筋あり初合百

二十日一筋の長さ一尋半あり内二筋の
走綱留りに用ゆ

一 小仲間繩のめ十日一掛たり一筋の目如く
二十めあり青く染る長さ一尋半蛇に
あり是の馬具の始りよて蛇と表せし
ものともあり

一 體覆のあり一革より一革前後の結よて
りし一刺もあらん

一 口割の軍中に用ゆる品よてのあけねも
そ割名太口割よて之乃めすさうりの布の
中へ麦さうと入れ是込ぬちて用ゆ併し
口割の呼吸のさうりもあれは長く用ゆる
具にありあるまう一是に昆布と巻き水に
ぬらし用ゆるとすへりて傷ますさうりあり
是も馬責の品ものたるへ一軍中返立
とあるとき息合の心得等しとりあり

一馬に探り馬印を附へ〜或は後蹄の下の
方ふとに長さ二寸の革と瓢か〜又の
三角は角六角十文字丸形松皮菱中月
ふとに〜して夫より紋を附るなり必ず用立
事あ〜ん又切付障泥鞍ふと〜紋又の合
印と附るも〜なる〜

一 沓籠の軍申又持す〜其のよのあけれ
とも〜元來其ふもい〜る如く馬と勞らぬ
事〜專要あり依て長陣戌兵ふと山に
立具持す〜きもぬ〜んや或は荷挾箱
よても持するやうの了簡の人の毛に
立具と糞沓籙ふと〜入て持する事〜ら
らんう又用馬の品物と知ま〜は〜あり
とも入て持す〜銜掛ふ〜物と〜の
する事と知ら〜の性ともある事と〜を

以上騎士用本

一 昏籠の事内との洞よて卯とまじりて
らゝ又籠にゝてもらゝ 武道勇術集

一 弓馬秘説よまゝ厩よて鞍をまゝ身まじり
右のまじりあとしひききして銜をまゝめて鞍を
まてむあかしと卒夜かけて鞍をまじり
かけて腹帯をまじりあめてまてむあかしと
まじりひいてまて右の鞍をまじりあけて
まじり又鞍をまじりまてまじりまて

むあかしとひきき腹帯をまじりかけて
尾掛あかしとまじりまてまじりあり
取伊勢家坐右之書

一 馬共暮の事 延喜式瓶部云々交易勿雜物云々
太宰府檳榔馬共暮六十領云々 ○按するに
行軍よりの人共暮笠を用ひて鞍よりの共暮笠を
まてまての鞍よりの馬と雨に沾す事固より
あれとも物と荷ひける馬よりの雨と懸ふへ
行旅の備よりの雨にまてまて洗ふへとも

あつとつれの雨具あるへー 馬書抜粹

一 口籠夫馬あとに糸るもの用意あるへー
とりし喰付く馬は用の味方人込の申に
て利用あり細繩の綱よてするもあり又
強よて捲え鼻の穴の裏と丸く志たるも
あり 騎士用本

一 弓馬故實よ云く鞍くつわに一口としふ
あり 頭取い昔の御よといふくちとけりい
一 かけこりけふと〜しふあり 切付馬はこ
野習志おての類いつ口の分といふなり

伊勢家坐右之書

一 伊勢常真記云く鞍よ柄立付るたの方
の志ほてよつくるなり 牛の角のいかにも
大あるよてするあり つけられいゆ〜この
入るあり

貞丈云くゆ〜この柄立と鞍よ付る事

武家のみ是と用るゝあらす公家にも
用ひらるゝあり一條兼^良長公の桃花葉葉
とりふ書よも柄立袋の事見えたり同上

卷之五十

五十九

戰場一

口

不

洋書

漢五郎

對校

甲一郎
尾全海

一

馬誌卷之五十九目錄

戰場部

戰場部

一 馬戦とりの魚鱗小鯉して敵に当り
 翼に離れて敵をうち返蛇小俵へ
 前後不當り房小車取て核をうち手
 小ありて別手にをあれ別手に離れて
 一手にあり若しあうとせられ後小ぬけ
 たうと思へ右小廻り電光石火の世ま

端より角繩十文京八花形小京破り紐接
弛通し飛行自在に業をさしつゝ騎
一騎を以て万騎をまゆり秘術といふ
あり 馬術要覽

一 或人曰く大川を馬ホて渡せしむ所味
の事河へ先つ洞の短き馬の野山をよく
洞長き以高あり馬の海川をよく遊く
といふも川ありて業て見さる人の越

に怪ありて人馬ともに犬死をへて古
人の傳へを聞くも河を馬ホて業り渡
せよ五騎や十騎をホて大川の瀬子き本
よて六具を志ぬ險を以てを認ホて越せ
人といふ馬の上をよても假令馬よく遊ぶと
いとも業渡し難なる一先つ川上の方の
障泥を巻澄はくもホて競まれば志よ
ぬおろり極るゝおろり三つの内まで程落

るよのあれが兼てよく細繩をもちてあ
たりさしてまふてもろ強けれハ程を端をつ
し手綱をな放し一ふ小籠れあてて死せら
といりおき川よてハ鞍の上を多洗ひ流を
よよつて鞍つふお案のてハ居られぬまのあ
惣別馬ハ頭を擧て三寸ハ多の中おあつて
立遊きまろよあて掃れて馬のあを浮
たろよ案^人の上をよても馬の二匹を浮上
て匹を同一ハ遊がまろノハまわれあ多一
百足^二百足の馬片内ハ大方右の^如ま
ま^遊よきあて^三つて^四を^五司の案^人の上を
あつて案やうハ秘密^情あり也昔田原の又右郎
そ後依ハ木梶系名^六言^七お案^八て宇治川を渡
を六具を志め^九を^十以て渡^{十一}し^{十二}あり大軍
を以て向^{十三}上^{十四}を渡せ^{十五}ハトハ案^{十六}ハ遊^{十七}き^{十八}まの
ありといり宇治川を^{十九}今^{二十}の川^{二十一}の^{二十二}

利根川
の
奥

よ渡きし所はさうしありぬへし利根川は今
少自由小川渡り難く是へし甲斐川若くは端
見されど歩兵のまればるの尾よ其附渡ると
きのかせ不成るといひる尻尾は其底にあり
そのあるは其附とこりるの尻尾のとつ付を取
川下をると共に遊ぶあり奥州の利根川濃
州の甲斐川山城守治川世外國とよるものよ
き大は必ずすあるとのあるは常人の出立馬

のこり^格らん言のなれよまよて乗渡さん

いさ急しり常の馬は鞍束よて六具を走
めて渡を指歩立一友人も馬あんとよ其附
よき大川を一騎や二騎よて川一文字よ乗
渡さん事思しよす一人共よ身のふら
りて^篋のため形は流れ渡りよ乗渡りよ
向ふよ岸をありて一人共よ乗渡りたる
と安堵の氣ざりありて先(常とんとして

篋たり

馬ハ人よりあせり強勇みなりんとして馬引
のつぎ逆極ト為る事ありとありされしか
廣より先の目當なりと一とあり交長の
こら此攝別大坂合戦の時節さうたら川もても
あきし雨よ乗入金屋高よりして人言共は太
方死したることを常ハ之具をも堅めて軍合
羽あは急したち付鞭旅登来までつぎ大方
いふ必中死せし事ある一と懸して多ハ深
きは身ハよく浮ぶ川より海ハ潮まで
物深くものありといふさし川ハ遊く
不たのあり海ハ遊く不たのありぬそのなり
いふこと海川とも風ありとことハ物更
大事あり何人教養の海ハ馬を乗入
強ふ所を書きたる繪を見ていひける此繪
ハ下江の書たる繪ありといふ又阿多人の

中ハ下ノの繪トハ證據有ヤトハハ答テ
曰ク深深き海中ハ乘入たる馬ノ尾ハ見
ゆ事ナハ一一爰を以テ下ノと曰ク又曰ク
寂盛ハ繪ハ遠海を畫タル也也されハ武吉
弓馬ノ家ハ生レれハ此ハ其ノ事ト一一
不忘用ホテモ一一遍ハ知ル事ト有ル馬
の家ハありテ知ル事ト多クありトあり
況ヤ繪書ハをいてハ海川乘ル事知ル
多クありト馬百首ノ中ト
巖石や海と川とを渡キとき
只繁人ノ心トよクあり
語傳集

一 敵陣近く働キ事ハ川ありに敵ノ川を
越ス越ス事ト見分ル事ト

私云くハ敵味方ト川を隔テ陣
を取備ハを設ク事ト敵川を越ル

越さるるこのしり事を見出し出て見切
やう是れ何れ九そ川を越へんとせむ敵は常
常は柘子よしては越さるるまのあり故に
馬上の兵多くして歩者をも連す障
泥ををのしうの石をきて常は九く
成て川上の方へ進むものありむり或
大将敵と川を隔て陣を取らる敵も
川を越え来りし備へを設らるとも人
敵をふらるともその小敵して味方も敵を
後くへられいとてまの斥候を友人より
付て見せらる一人の斥候来て中は
敵ハ川を越え来りきよて山を子細ハ川
を越え敵ハかけさ障泥ををへ六
具を志め手繩を志め腹帯を志め歩者
を拂ひて見ゆらるし付ら小此敵更よ
取のこもくありさるゆへに見切めり

あり 兵法物見

一元龜二年五月中旬旬武田信玄入道晴信
駿州田中の城小軍兵を籠め並近邊小相
をさきけり

家康公彼を退治せしめて大井川の海
邊まで御出方ありし折節大井川以
外小多出て渡せしきやうにけれ田中
の軍勢洪多を得たりとして向の口小打
出て大井川

家康公御覽ありて多き少し干落よ
うに武田の奴系跡らす討取んと嵩かみを
あてて怒り給へとも満多あれは中
かうりし変小大内若一郎政徳進み出仁
徳の事れ山へまゝあるこの干落を初りて
も山あり某いて瀨踏を休り由覽小公一
とて手懸ふ十騎典力七十又騎に下名を

し各互の障泥をとり禮をつかき、肛帯
を志ぬ互よ、險峯を組た下向の洲碕一
筧ため形小渡も一として軍士の足並を
揃ひけり

家康公御覽ありておひ野をりき大沢を
ハ渡もるり無用ありと再之制止致しとも
改徳ををりぬゆもあへず伊良尾の瀬小馳下

りまの先小進み張り落る小川を一百餘騎
の軍兵あり先小と騎入常備き日本と無双
の小川をを一騎と流れす向の家よ打揚り
大井川の先陣大内内若一郎政徳と名乗
呼り呼へ下馳りけり 大内内家傳

一 慶長五年石田三成叛逆を企し、ハ
家康公上杉景勝をすて上方よ登り、殊不
大井川の向ひ方多金谷の宿は中陣を居れ
し、中供の人とい思ふ島田に張りたり、

六は六井川の岸に臨んで川の面を見渡す
に此二三日陰つまくら時雨に水増して逆
波高く漲り流急いで渡さるへうも見えさう
けり六は政宗戸澤に向て夜中、案内
知るも川を渡してもよくなき是まで追
急なれは急ぐべきにもあらず今夜島田
に宿陣して明日川を渡し金谷の古本陣
より島田目見いしゆいんやとり島田澤邊
て川邊の中さうし候一理ありされども此
水夜の内にみ落つておす所迄と我々の馬
よてゆる渡り得さうへやといひ六はむと
同一歩者を明日来より島田に残り單
馬強き者をすくうて障泥を蹴をふち
盛安政宗は腰指に挑燈を高く付て先
小瓶と葉入しは是を見て續く兵戸澤
勘兵衛を先として務者とも多く渡り

一 云州遠州庄分國のころ山縣々をけり(敷)
て天龍川道くを御とくときあり

徳川家の戦士宮かくくして戦ひく味

方利あがりへ事ををく各船に乗るや

おくりかん天龍川を忠越よりち入ける忠勝

例のことはく跡に下りて只一騎馬をひく十間

さうりお海さきさき後より山縣々先鋒百騎

をく祠をかけて追々々を見らとひとく

川中より取て返りけるを執ひ龍神の波

瀾を蹴まらはくをけしきにや怒れん

例の平八ありと一騎と駐合せよしては

多るも入て大河を急越を中流小して

引返すべし哉（越）事ありを忠勝とて言
き免角筆書れ及ふさうひに阿すとい
君片
言行録

一 伊賀越後とき谷川出水して船か一柴舟の

通る山を中書（招）まぬとて山とも船人喫金と

中書族炮を取りためりされぬ是に船人

驚き山を舟に上下段に渡さしめを後中

書ハ馬の口を牽て歩渡りいこされぬ知に

此甘原而人衆をらんぬ此に居ぬを見下又海

り馬に當せ中書ハ馬其口をとてお（越）

越
こころれ中書より
武功雜記
國朝大業廣記

一 壽永二年六月一日源氏俱利伽羅志雄山

大子搦手の大將軍一つあり五万余騎引

具して河（安宅）の渡りよ押寄りて平家橋

を引りて水ハ濁て底見之申源氏もさうか

く渡りてして北の端に相へりて越中國

の住人石黒宮崎中より我等先よ城構

て待しとまひ平家の渚をこり渡りて山ひ
くわ案内者を以て渚の瀬踏をして師
讀ゆつくと申され木曾加賀國の住人
林六郎光明を召て汝の當國の住人あり河
の案内知らるらへ瀬踏仕事と仰り光明
兼りてよまし馬十匹探へを彌結りけて追入
りて鞍爪力革をいささりなり木曾川淺
くあり渡せ者共ことと知しけり云
源平盛衰記

一 河水を渡りて法あり教へり一騎渡
りてたらしといち志る一佐々木梶原の友
人生暖摺墨に乘りて宇治の大川を渡り
て世も登巻を渡せり田原又右郎畠山庄
目重忠の法を以て渡りてを功ま
世もひけり大海あり小河あり深きあ
り浅きあり石川あり砂川あり沼川あり
常も決別して人可相親しててあり功

ハあるものゝ念一 馬術要覽

一 川を前より陣を取らるゝ何よても筏より置れ

川の舟を心懸て中へくはせりかきりて筏より置

その是をかく又渡さす一かかハきりとき

ハ道具筏として、捨ちてを組合せ舟渡り

事もし又馬筏より舟をとり取ら渡す

事も是あり山弱き一るも強き一るもひ違造

作らるゝ渡るものよてはわやりの妻一を道具

筏馬術と云ふあり 此齊軍禮書

一 馬筏を組んで渡して舟みをやと中者多

依木高綱字 治河を渡す條にわやりの河を渡すは馬筏

を組んで健馬ハ上を小立て弱き馬をハ下

を小立て馬の足の届へまでハ綱をく

れて遊らせよ馬の足をなづまハ弓を力

綱を指くつりけて妻舟の舟綱をち

編めよ四居小舟にほれて遊らせよ舟

強く引て馬小引まして過ちまを尾口
沈まハ前輪まをぐれ馬石突せまを
小内鎧を合せよ我等渡るを見るあハ
敵ハ定て矢念を作て射のらん敵ハ射
るとも相引して鞆射るるを痛く伏て
変射るるを射向の袖を指かさせよ
の奥小透間阿もを水強くして下らん
者まハ弓の弾を指し出して取巻て游らせよ

金小渡して過ちまを馬の頭を水面より引
立て童屯かり小弓の本弾をおかけて曳
聲を出して馬小力を副よ渡せ者共
と下知一つ真先かけて渡り
兼無の
下知あり

源平
盛衰記

貞丈曰く金小渡せしりふ直小一文字小
渡まをり古き詞ハ真直ハ一文字
を金といハ曲尺を尚るや

馬を以て金とハ曲尺の筆あり○名褒
ハ天邊あり今ハ八幡座と以て曹の頂上
の穴あり不を以てうりむき過とハ穴一兵を
射入らるるを恐るるなり古作の由ハ天邊
の穴甚大なり 武岩考證

一馬よて海を渡す 依ハ木之郎盛細藤戸を渡兒島合戦の條右大将

家の御自筆の柳下ハ文ハ云古より川を
渡す事先例ありといハとも来ハ遙遠
を渡す例を聞キ則ち彼嶋を賜ふの

上伊豫讚岐兩國を賜ひ畢ぬ 源平盛衰記

一新田義貞越前の府を渡らるる時

先ハ渡さんとおのそきたる兵三千餘騎是

を見て一度よさつとお入て弓の本番あり

ハ馬の足の立不をハ手繩をさしつらりけり

歩ませ足めたぬ不をハ馬の頭をたき

けり遊りせ真一文字ハ流をきつて向の岸

いけよりさう

太平記

一豊州耳川の戦は、大友方の先を吉弘、近
濫直、齋藤兵部、瀧實等が率いて軍
評定もろとき、鎮實の家頼の郎等を召あ
つめ、濫直、其兩人を左右の先と仰せられ
ぬが、諸軍も後れていそろろ（さざり）させ
大川を渡せし、深く心得あり、事なり
兼入場より向ふの上り場は、吾意をよく
見極むへし、兼入のまよきとして、上り場悪
しゆれ、跡無し、お越と敵にも安こと討
つ、そのあり川を渡さへと思ふとき、百の
足並を止め、勢ひを出させ、勢ひをもつ
て乗り合へし陣取るとき、川端より二所
あり、ひい五所も引退きて、侮（を）えろ、此事
あり、又川を越え、来る敵を川端めて、
何として、留られぬ、勢ひある、ゆへなり

是よりして川を越え来る敵に五所
引退きて待ち敵川を上り来る交を味
方敵間五所の處を足並召め強けおせ
て靴を以て追崩せしきあり惣して障
泥を解て泥をたより繩あて力革も強
び付たるがよきを靴をきをらせへの上小引出し
前輪小引場ぢ志のと志めたのをもて
右に舟にしての漕もても長刀にて我々舟道
具を舟強しおこして拵はしらを志められた
馬あをおひふのひ下して力抜けをたもも
のそろは足の届るる處あてに竿立小立て
跡をうりまて渡る跡足も届めざればどろく
と沈みさて浮上りし面をうりをせし遊
くを察るるとのふあければ馬かしをよ
とき面をおとのを綿馬纏ハ多小溺れて
悪し板をせへがよきそ寒き時分綿を

せんより志とれい案る人こをむる^{本和}あり
とと下知しりる 尤友記

一上杉家の將士上野の邊塞を攻る事あり
信玄後援たるに、其思の下桂川ありふ
し霖雨ふして大水漲き、れり、其家をこほ
ちて筏を組渡し、これに渡るに、さき
水に押流さる、これを渡らされ、後援
の甲斐あり、渡さんと、これに溺死せんこと
を、^おやもむ、何せん、と評議せし、その案に
川平の功者あり、ゆる、古より、川を渡る
み、熱ハ沈没せし、とり、大熱ハ沈没せし、と
中傳、山守治川、其度の例、その能援、小
て、山守より、遠きこと、近きこと、後、其度、こ
渡りて、見、山守、馬を、力らに、一人、人を
た、う、り、に、して、手、と、子、を、組、渡、を、さ、り、大
熱、の、き、を、ひ、を、以、て、其、自、身、を、案、入、ら、れ

徳軍一同小渡とこれに少くも危かや
中たのき信玄聞交即ち下知して渡さる
に騎馬ハ勿論雜兵小荷駄に及らざる
なく渡り得て敵を追拂ひ身方を極
れたる 碎玉話

一 元正元年信長靈陽院殿を宇治の栢崎の
城に攻るときありしも雨ふりて川水岸をひ
とせり信長馬を水涯に駐めて昔は梶原
佐十木も鬼神めてあよも下りどといせり
交り此者一騎川にち入たるを見て
梶川弥三郎高直ありて梶川討を
涉せと下知してをさしりて是先にと
うち入て 後 けり此戦の前も信長黒
の馬の と 梶川に と 入る其とき信長梶川
り志し重ぬての軍に先からんずるもの
ありとあざ笑ひていたましり果して其

詞よた^はハさうりけり 常山紀談

一越中佐々成政退治のためよ秀吉出陣の
とき尾を甚右衛門忠信者牽引して青
小赤越也爰よ加賀越中ノ境破波山
の道筋にハ出城多くして通り難一砥
波山ハ少々の宮北の方ハ山のけハき交
を越りの處馬立立さる道十間をりあり
其とき尾後下知しけるハ馬の銜の取方ハ
差繩を付与取両方ハ引張る繩を結ひ
て前輪小掛^ハ馬の前足を揃へるをよ下
をハとして軍勢悉くこれハ従ひ子細か
く通りぬ尾後取ことよ其言葉を忠告
勇士の下知しよハ同時越中ハ大
海いくつもありて大けまを何れも馬を遊
りせぬ此ハ八月下旬の事あれハ時雨等
てる増けるを尾後下知してまの障泥

を両方よりをのり取り持せ馬の頭を
少く川上の方へ引上げてを總をかいた前
輪はたのまゝして左添（右の名もて）を總
を持さしく銜を川上へ引上るときに馬
小聲を掛るのまゝ端の眉間を見鞆の
後輪は号り川上の體は軽く踏み川下
の體を強く踏みと下知せられてかくの
とくいたる大衆雜ちく川を越たり

とく 前橋舊日記 前橋書

一 朝鮮帰陣のとき長船川端水ありて
笹前中納言秀詮大河内政朝を召し
越後謙信輝虎は坂本太郎を越えたり
ゆゑ予川渡しの程古小此河を渡せし
思ふありぬ何れかんとし政朝此處へ
て此川を由渡し阿方まききるりて
小く中を秀詮いてさしハ諸士を下知せよ

と作せしむれハ改朝馬小舟乗地也て只今
川を由渡し一馬きとの事あり各障泥
を衣腹帯を志女長を拭ぬ、襪を繫ぐ
下といひ觸れざる足あみを揃へ改朝瀬
を踏す下として先小舟入りぬ諸難ハ
秀詮を真中小舟包み一度小舟入りける歩者
共ハ其川下を渡り一人も流ぬ瀬
しけり秀詮喜悦ありて初のことはの様子
小てハ日本國中の大いふ許あり川をたか
し今日の川越え偏ハ大河内の下知由なり
として甚き褒賞ハ預りけり大河内家傳
一秀吉北條氏政を代るとき馬船を小田原小
まハさるるに遠州の柳前崎ハ去りしより
馬の事ハいふ及はず馬道具をも船中の
せすり謀りて馬皮よてしきてたる蒸さ
ハ船中小あれハ必らず破損する事慶々

なりされ、謹て口は馬より、事をも忌
と言傳へし、中者あり、秀吉自筆の状を
書て船頭はわさし、是を龍宮に達せ、難
あり、さずとて舟ともをのり出、彼所
より多れ、候、風雨雷電して日中、忽ち
闇となり、其とき右の状を海に投入、
ハ風雨忽ち志つ、うて船急なかり、
小田原、無難可被、通之者也、龍宮殿、大洞、
書れ、う、是ハ偶徳なる、一けれとも、此數の事
も、一て民の惑ひ、う、言傳へて、其理を、害あ
るもの多し、秀吉學問の力を、一とい、
生質、明敏なる、也、一不夫の理を、誤、破せ、
れとも、愚昧の、私、
聞きを、慮り、其心を、安せ、
又災殃の、氣を、以て、
これ、
又災殃の氣を以て、これを、
又災殃の氣を以て、これを、

裡を見よのとりよ(す)り 武將感状記

一 四國の侍軍を江別佐の弓矢小回車して
敵りるを然てえ(か)きめて討んと仕振か
り九州を出羽下野國の弓矢と一同して
お掛りぬしてその内一侮(か)服(か)の(か)き(か)く
侮(か)敵(か)を服(か)不(か)請(か)て若(か)魚(か)か(か)小(か)旗(か)本(か)さ(か)
突(か)ぬれ(か)勝(か)こと(か)思(か)ひ(か)浩(か)大(か)筋(か)遠(か)と(か)各(か)
常(か)よ(か)この(か)一(か)戦(か)を(か)好(か)む(か)よ(か)一(か)か(か)四(か)國(か)の(か)必(か)何(か)
小(か)も(か)ろ(か)う(か)大(か)を(か)お(か)も(か)く(か)水(か)率(か)尔(か)の(か)を(か)き(か)ま(か)を(か)
せ(か)中(か)相(か)毎(か)大(か)事(か)に(か)ま(か)る(か)軍(か)法(か)あり(か)四(か)國(か)九(か)州
と(か)も(か)小(か)船(か)合(か)戦(か)を(か)好(か)む(か)あり(か)を(か)彼(か)り(か)得(か)た
る(か)處(か)あり(か)陸(か)の(か)事(か)ハ(か)船(か)戦(か)ほ(か)と(か)も(か)得(か)す
陸(か)よ(か)上(か)る(か)味(か)方(か)を(か)り(か)て(か)船(か)下(か)り(か)る(か)を(か)も(か)ま(か)と(か)
き(か)と(か)船(か)上(か)馬(か)を(か)舞(か)あ(か)ま(か)る(か)と(か)も(か)ハ(か)鞍(か)の(か)力(か)革
通(か)一の(か)穴(か)より(か)線(か)を(か)下(か)け(か)ぬ(か)院(か)あり(か)初
る(か)も(か)あり(か)大(か)水(か)より(か)澄(か)深(か)と(か)も(か)ハ(か)必(か)ず(か)

流をまよのあり、惣別軍陣に金澄を察
らす小毛皮の障泥も、あつち山あり障
泥ハ泥多きを念むあり沼田を渡し山と
まハ泥付て歩れ後ハ馬をます早川
を渡ると、^こ隙あり障泥をとれ石
川あり水目をあてを細ハたのきの内を
十文字に引緩めををあげを右ハ
尾崎をとり、^先あけて尻掛の組遠ひよ、
添ハ尻掛の餘りをハ鞆の後輪の爪小
掛總目と結ひて二重尻掛、後端ハ掛
り立透し川上ハ澄ハ踵を右ハ端あせて
爪先廣く端ハ川下の澄ハ腹の方ハ端
あせて、少ハも前輪ハ掛る、すす向の岸
十乃をうると見てハ馬必ハ、いれ多きの
あり、生とき聲を裁れハ馬あつちある色
ハ沈みて必ハ、鞆離れをよるものあり

岸近くあるほく葉を心をはなれ
手綱を強く引くす大方里の河
とも前思ふ交を之間五間川上(常)
掛けて少く流れ上りよ上るづし餘り上
けさしての運さまふ所と由(必)す
より兼るものあり敵向の岸より多く防
く交い必すすより場と心得(又)中活
とに川を渡すは跡より主人
とも子川のうちより馬を無返しし川
必す水に押されられて人馬共死す
るものあり向ふの岸まで渡して言を休
めて返るし他國の知るる川もて向ふ
の敵防く不ふ渡瀬とあるん所あり
味方の防ぎはん所よ大川の河とも廣き交
瀬ありものあり洲のあり交い上下は渡り
瀬ありものありうづ巻たはぬもその

處中窪あり餘のまゝ渦とも不流り
まのあり淵のまゝ丸の巻あり餘のまゝ
巻ふ尚りまゝあり足の入ぬ川も大水出
てハ二三日ハ足入るまのあり砂川の日た
ま小さく渦の巻て砂むりくとより巻く
不つれてあがるまゝ必まり足今まのあり
泥川ハ埋まなく砂川ハ埋まらぬ中流
の川上ハ必まり埋まらぬ川向ハ氣をひ

阿る事 一 本 記

一 戸肥才左衛門とよまの奥州ハ在り川
を越して向ふの駄合より皆船ハ来て
馬をこゝろに置いて川を越す此半左衛門
弓を川ハ赤入船ハ引添て川を渡りしめ
馬の足立不より一弓ハ當り移り一番ハ先
陣せりとて此者元ハ越中ハ居りしより後
小戸澤ハまに属ししよりとて

前橋舊藏印書

卷之五十一
六十 戰場二

十月四日

對校

淨書

讓補

飲四郎
左名傳

二

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

六十
卷之二

馬誌卷之六十目錄

戰場部

戰場部

一 長久手此役不

源君討勝給への秀吉の軍勢恐怖の
色ありける秀吉衆を督して出て
戦んと勇め立ちられけし衆兵奮激
の氣をおこしたり

源君の兵秀吉の目み餘る大軍を見て

驚きたる辨ありける

源君軍中小令して其翌日馬搦をお

し給ひて清覽ありけれの味方敵を

呑の心をとおこしたりとそ 碎玉話

一寛永十癸酉年八月三日

將軍家品川への清故あり是兼てより

老中清近智系小出旗本諸番頭細中

物於其外は使番は月付以下の馬搦

上覧あるへき上作おさるふよりてあり

今日馬搦あり具足羽織を着し陣

刀を指へしと其衣裳綾羅錦繡綺

羅天を輝やうし鞍鍔金根を縷まめ

押搦の厚総程く排風情を乞すあり

見物の人々目を驚くす暮不及ひて還

清あり 寛明日記

一山内去佐書一豊其はしめ織田家に

仕へたりたり東國第一の駿馬ありとて
安土ふ亭来てあきふ若あり織田
家の士是を見る小誠ふ無雙の駿足
ふれど價（目）あまりふ貴（一）とて求む
へき人ふく（法）づ（法）ふ亭て帰ふんとす
一豊其比（猪）右隣つといひ（一）づ（一）この（一）め馬
望ふ堪うね（れ）とも（い）も（か）あふべ（う）

されの家ふ仰り身貧（き）はと口惜（き）事（の）
あり一豊奉（ふ）の初ふあつ（ま）れ（か）る

馬ふ糸（て）屋形（の）茶（ふ）出（べき）お（を）と
ひ（と）り（言）これ（の）妻（つ）り（ぐ）と聞（て）
其價（い）ち（ま）かり（あ）て（う）ゆ（と）問（ふ）貧（金）
十（五）とこ（そ）い（ひ）つ（れ）と茶（ふ）妻（聞）て（さ）ほ
とに思（ひ）終（ん）ふ（其）馬（求）め（給）へ（其）料
を（い）ま（わ）す（べ）とて鏡（の）奩（の）底（より）
こ（り）出（し）て一豊（が）茶（ふ）さ（し）る（一）豊

大小おとろき世年おとろいごろ身貧くいて
昔いき事の多うりに世金あり
ともあうせたまのすん強くも色を隠ひ
けん今秋馬得へいとの思ひもようざり
きと思ひの悦ひ思ひの恨む妻作せの昔こと
まうあてこそいへさりあうこれのこうの
世出家ふ系りいとき父は鏡の下ふ入
体かひて何あるこの常の事ふありく
用ふへうす汝うまの一大事とあうん
ときふまあうせよと戒めだまひひきい
されの家の貧いきも世の常なれの
堪忍てもさぬべい減ふ今度系にて
馬揃あるへと取れの世事天下此
見物あり君も又つうへの始めありよき
馬召て見系せさせ中さんと存ひてこそ
なれといふ一豊悦ぶ事限りあく頼て

其馬求てたりはとなく京小て馬搦
 ありしときお急て出しうの信長大に
 おとあきあつまれ馬やとて軍のよし
 吹給ひ東國才一の馬遙うふ日方ふひ
 て来りしを空しく帰さん口をさ
 車ぞとよそれふ年比山内ハ久しく
 浪人してありしと吹く家もふ
 くにんに求得たる信長家の恥を
 せんきたるうへう箭とる身のたふみ
 是に与たる車やあると感して是より
 次才小用ひられしとそ 常山紀談
 一 白井童松行盛 出度保り
中山性格 物語小毎歳正月
 二日五月五日八月朔日家中馬搦これ
 有り馬持の面くの残るす強出車あり
 何れもよき馬を持事あり二百石以上合十五
 以下の馬を調へしハハの家申にて指をさし
 馬初心の信口をさしとせ兼ハ躰を見て

幸利公^{青山大膳} 以後へ小右童松三葉孫

在て目引鼻引て笑ひゆへともは前作

せうれゆいけ若う親ハ何某とて馬も一拳

と系り何くの役を勤め何方みてかやう

の奉公ある若あり其許おれの頼もしく

思召あり馬あしく初より上子のあきことの

ありあの若も候く修乃精也一が追付

用ふ立山時分の見事ふ役ハ勤るそと世意

成されゆへハ其後の笑ふ事もあらず棄

馬を勤め一壮士のありうき事身に

勝りおのつうう馬初心あるものハ少く故に

かへ今小青山内家の流ハ何れも馬よく

と系ゆゆとの世上沙汰あり一とふ青大膳

一 寺澤志別の家小千賀五助とよ士あり

カ二人小勝れたる正月二日志別唐津の

堀中ふをいて馬様を一て見物せられ

ける何とくくたりけん人喰馬銜を
腹して駈来る千加これを見て襟の
も、だちを高くとり馬場の中ふ走り
向て片膝をつひて待つは馬千加を
見て眼をひろくせ牙をむき飛かくる
所を立さまに平頸を抱き伏せ
て膝ふて平頸を一き手を挙て馬
副を招き口をわりて銜をまめさせ
たり碎玉詰

一馬も古ハ尾竹筋をのへるく尾ふ車尾を尾き
ひ或ハ古ハ尾もの尾開尾きを尾く尾ふ車尾は
細道細繩尾ふ尾悪尾き尾ま尾ま尾れハ
あり今ハ見ても尾ひ尾ひ尾ひ尾て尾養尾る
たり古と今とハ吟味する車格別の
遠尾ひ尾あり尾古尾ハ尾武尾道尾の尾せん尾さ尾く尾さ尾り
たり今ハ見尾て尾見尾車尾ふ尾する尾を尾第尾一尾

ふなり昔信頼源の義朝小戦の前小
馬をみせしるに義朝ほめていそく
此馬はいうある堅軍をも乗破りたとへ
堅備といひ大川大山沼澤ありとも
少一もおほつりなき車あくひ四ノ子
足共そろひたると松明をありあけ
ほめしる大敵小次まうれ剛敵小次
らるるの古も今も名将のふ一のこ
あり 山下秘録

一 騎術小四義我あり 義経鶴 馬小の一ふん

二に手綱三に鞭四小鎧といひて口つ
の義我あれとも不冷心を以て乗もの
若き殿まうの見もおひ素もあうへ
義経ら馬の立やうをおふせよとて
まの送さま小引向け 後續 歩 下 知

しつゝ馬の尻足引寄せせて流れ落し
に下しなり 源平盛衰記

一物崩れて樹木茂れる高き峯ふとに
てのまゝせ馬ふして追下すへ大方
苦しうらさるものあり 武士道切著書

一たふの馬の系をて山よりさか落しし小する
とふの古へ義経公一の谷を落されし

やの車まつ第一馬小するへ系合
よくいふも強き馬鞍うへらぬ二重腹帯

一て支を澄を志かとふみありをまつ

鞍つを立すの一戒は我にをハ馬の
さんす付くほととなり手綱ふさを

系へ馬を一文字小落さすつら下り

に系とき山のかへ系かふくん小系

へ一是を岩石落しともふ又少

も馬小さひてハあるす馬の手総を

かとし主の馬と心を一つあてて落す
へふもとへ落すと馬を横へたてへ
是秘事ありと人の語りはり
武道

武者集

一 岩石を落して大切をふさぐの大馬の
御
まゝらきたるへよりて亦曾義仲
追討のとき東國勢と見るに大将

義経の薄墨青海波長谷 範頼の霞
月の輪蛤 上総介廣常の磯と小馬

流石の
山

又千葉常胤の薄櫻 白山重忠は
秩父太麻毛大黒人妻高山 蘆毛和国
義盛の鴨の上毛白波北條時政の荒磯
淡谷重國の獅子丸平山季重の月輪毛
熊谷直實の権太栗毛初櫻ふと
下進退無類の駿足を牽せざるたより
織田信澄丹波ふて小姓共六七騎ふて

出たる小朝ヶけ小敵三十まうりの申へ馬を
入るく小首をよめて帰る其申小小支
助とよ者馬三寸あまり四五寸小及ひ
くるる舎人の續うす殊に指物をさし
禮を着て首と襖と首取刀を持って
棄んとする小二重腹帯ふてやちう
くく鞍くへりして棄られす其内に敵
数多かへりて小支助の討れふけり
されハ残る六騎曼を救ハすして帰り
ける事世の中の報りとそありふくの平場
己れふちきたる大長の馬小棄へうら
さるのはゆへあり且又故実小委しかろ
さるゆへ小支助大死して傍輩までめ
悪名をよぬること口惜き事なれ
後年大坂の内陣小大長の馬ふて切
も阿りし事あり是の棄人ふよる

前橋藩藏聞書
續武家閑談

一古へより近頃までの和漢の記録を
見侍る小戦切をありたる名馬と
いふ何れも強馬ありて驛いざめる馬
其あり不驛奴馬の戦切をありたる
其例をいさへ少す然れとも已小勝
たる大馬強馬をの素車ありれとい田
與市タの素車顔ありてこそ候野と長尾
小討れぬ林六郎も大栗毛小乗て小國
合戦小命を失ふ然る已る事小かふい
たる馬を素へし事小や楠正成も勝
勢の馬何れせん長三寸まくり力量
有りて足強く遠行小勞れざるをよ
しとするとき書るもは事あり
武馬必用
馬術要覧
一古き士の物語小戰場にて素ままり
馬ハ第一物駑馬まする馬臆病ある馬

さての我手小色たる馬等ありかやうの
 馬小糸ての存一もあつさる落後を以
 ちのなりさもこれそあくと物前て
 馬の進むをひはくはくむる辨は見見
 一我糸て片手綱ふても八方へ
 ね思ひひのまに馳驅せうる馬猶る
 へく常にのちと内場あると存する
 馬も戰場ゆゆ流をみての思ひのかん
 よく糸するものあり年ハ七八歳の馬
 よしとす若き馬を好て糸へうす
 だけハ二寸五分より三寸志ひて三寸五分
 まて志うるへ一それ小色れの上り下り
 自由仕にう一ねろ一の馬小糸へ
 うす鞅下を立すうすとこの糸に
 う後つうす時禮武者の常の時に習る
 へ一た下地の馬を好て用へ一

といへり

細川幽齋自記 竹中百箇余
軍法義葉集 武者物語

一強馬僻馬を好む事ありれよく棄

得たりとりふとも時ふりり自由ありぬ

こと多し頼義の曰く軍中ふをいて

若し武者の少し一氣の後きたる馬に

棄て我心軍に進みいふも先をかせ

くのありこそ見ても見事なれまた

軍不利もある事ありんば色する馬に

棄て手綱ふ力らを入る僻甚し見に

いし老武者の氣早ある馬ふ棄て馬に

任せ若武者の前ふ進て我ふの軍功を

めらしす躰最見よし心後れたる

馬ふ棄て進みりねたる見分不似合

ありといは後を考るふ実小味ひあるへ

記小曰く予よく引くを得るといへとも

強うの好まぬより馬よく棄を得る

といへとも強馬の好む車ふうれといその
るちあるを戒めたるあり一已持用集
春日山日記

一輝虎公のいもく高名をふさんと欲
せの障云だといへ障云の景得たりとも強馬と

僻ある馬ふ景へうす將士共ふ上
下年の景別なく景心よき馬ふ景て
策ふ瘡を合する道あり強馬に景

て駈出たりたるを物前みて控止んと
するも見昔しうるへし其上馬強

して己う年ふ限りぬれの不覺の
死をこするものあり北越家書

一大馬を好むことなうれ如何とふれの
景下り自由ふらさるるあふあり常の
乗下り自由ありとも禮を着ての

身重ふるゆへ不自由ふふるとあり其
上或ハ幾勞れ或ハ口休あつつありての

利を失ふあり猶れとも棄込馬を
入りふの大馬よしとあり是の格別の利
と知るへし 一已持用集

一 元龜天正の頃よりも小長の馬を
専用とす和田伊賀守惟政龍川左近
將監一益竹中半兵衛重治等の功士
何れも小長の馬小乗て武威を振ふ
ありし 秀吉公の御り 瀨軍小乗給へる
馬も小黒とりふ二寸小足れる馬あり
口く夜々に 戦ひ殊に盛にして服ふ
らんも 武具を着て舍人たく
馳り下の 自由あるんの 小長の馬小志く
へくすた 大河を越え巖石を落す
にの大長の馬利あるへし 元暦の頃の
専一小大たけの馬を用ひありし 續武家
一 夏は 陣は 旗本崩の事は 柳原遠江守

家来今度の使番寺島弁之坐に
出尋これありぬ処誰との存せず黒
馬小のり楮の指物にて遠江を備へ
系込山によりて名を聞山への出旗本の
奉行元とぬる依て中上る是則ち
小野次郎右衛門あり是ハ次郎右衛門息
又助今度の出陣前に無雙の大馬
をか来たる六日の晩次郎右衛門見て
かやうあるは強心知れざる荒馬に
乗山への不覚小深入りて大死仕るもの
あり我馬小系替中すへりとして常々
系込山馬に又助を系せ其身ハ彼大
馬に系て出たる案のこころに強
ふて度度破り出心あるす遠江を備へ
系込山と中車小ハ
一我小乗得らん覚之ありとふとも

至て荒馬の身を戒とありの基ひあり
今川式部太浦頼國海道の大將にて
京より下向し遠江國依夜の中山にて
先方の大將名越としふ若者を討取相州
湯本にて海道の敵要害を後うまへて
まへける間北の山に歩上り手勢をか
りふて敵の中へをとり入て敵志

へき道ならずさ城き岩崎を五町
まかり落し二條家より贈られける
松凡としふ名譽の荒馬にのりてませ
けれハ馬の尻足のをひすねの皮皆
破れけるとありさて相模川ふて大
水に敵さへえける上下の波の依り亦
判官入道以下渡す中の殊に強
ろりを頼國あり馬をめこめこ已れ

渡すとき勇にまう^任せ考へもふく乗入
河中ふて人馬皆射^殺たされて討れ
きとそこの頼國の今川貞世の祖父
あり
難太平記
前橋舊藏圖書

一山路小踏迷ふての水の流れ小舟を下る
へ一必らず道に出つへ一野路小踏
迷く野澤の澤瀉を求めて葉の向

たらん方を指して行へ一澤瀉の
必らず人倫近き方へ向く也へなり又

雪中ふの馬を放て其跡を見て行
へ一むう一齊の管仲の所置を見
て知るへ一 義貞記

一義経鶴越小廻くの條に義経宣ひ
けるの味方の勢の中ふも一此山の
案内知るるものやあると問給ふ答る
ものあり一爰小武藏國の往人別府

小太師忠澄生年十八不城々すみ
出て甲くるのかやうの事ハ先長達の
ものヤすへき事ハ末のミのノ入
へきル甚シく恐れ侍れとも親にてい
ひハ入道の常ハ教へハひハ若者の
聞も留へ山越の將をもせよ敵をも
攻よりハ山ハ迷ハらんハ老たる馬
を先ハふ立て行ハそれ必ラす道に
出るハありハ教訓ハハハひハきハ今思ひハ出ハ
さもやあるへうハんハとハヤハたれハの御曹司
あハさる事を聞侍り齊國の桓公
孤竹の國を伐ハしハき深雪路を埋
めて帰る事もかふハさりハくるハハ管仲
とハハ若老馬を雪ハ放ハて道を得
たりとハハ本文ハふかハなハへりハハハハ
も神妙ふとそ感ハハ給ひハくる

源平盛
衰記

一天文二十三年十月下旬上杉政虎公驍
勇を関左に活潑し給のんため小
深雪を凌ぎて上州猿ヶ原筋へ亂入
し給ふ歩兵悉くかへり杖をつけ縦横三
間つ小竹を編み道路小ならへそめ
上小藁筵を志きて馬を通しぬ其
踏馬の内ふてもい、旅行小熟せざる

北越家書
輕弱の案の同く此物を履行しむ

一天正十一年癸未二月龍川退治として
秀吉勢州へ出馬のとき安樂越
より兵を遣のす小一番にの中村式部
少補其ころ孫平次といひし二番の
三好孫七郎秀次なり安樂越の切
爪を滝川切落して只横合小通る
その道ありて馬の足立す先小通り

ける^者に^め取馬の尾を一人取て通る
に谷へ落ぬぐる處ふ古老一人出て
馬の口を一人ふてとらせ跡を見す
まづくといひて引けるふ強ふく馬
通りぬこれを見て三百騎の軍勢
はのこ^りく^りけれのこと故ふく詰
通りぬと^{なり}前橋舊藏聞書

一安藤帶刀直清若年めとき早馬を
高直ふ三足まで求めて朝夕馳走
けるよー頼宣卿は聞乎前へ召れ
淨意にの早馬を秘藏するの馬教
寄の第一あり然れとも早馬の傍
軍の先を^阿ひ^ひいて先陣を搦ん
ためありこれ^の一騎合の武士の馬好
あり國^の一^の大將の馬好の一家
中の^の手勢の馬廻りとも面くふ馬を

持やうふ身上すりきくらぬやうにして
馬持の多きやうにするる國主一手の
大将の馬好あり一手の大将番頭
我一人早馬ふ多りたりとも諸士
組子の馬弱りて我一人の馬早く
ても役ふ立す家中組子馬を能持
やうふ下くを養ひとくしてをい大将

家老番頭の馬教ありといふものあり
と作らるる旅生亦庵を召れ漢の文帝

う千里の馬を受給のさるふを帯刀ふ
讀て聞せよとい意あり本庵別ち
通鑑を持出有献千里馬者文帝
曰、鶩旗在前、属車在後、昔行日五
十里、師行三十里、朕乘千里馬、獨
先安之、遂不受千里馬、云云 淨意に
帯刀これをよく守て能く心得よ

國王一手の大將、我身一人の馬好の
むとのいひひと作られざるあり

紀州頼宣卿言行録
南龍君遺事

一 戦場にて敵陣へ馬を入るの平場
の合戦ふ敵大軍にて歩行武者の
とき味方馬強きを持て素入敷る
事ありあふかち首ふ心を惣ぬれハ

害をかすもあるたるのと高く名

せんとて馬をぬるの害を得る

このあり人ふも馬にも聲をかゆ

ぬ澄をぬみ鞍のからさるやふ

棄へ一 武道勇術集

一 馬を入る事まつ吾騎兵を搦へて敵の

厚形役の心き備へ入へるす 一已持
用集

一 馬を入る事凡騎兵を撰ひて其場の

敵を見きりるを妻子より入るへ一

此を考ふべし

但し敵は軽の伎ある馬多く見之の遠慮すへし軍鎧要畧

一馬を入るときみこころある備は

おくして入るとき右の先へ

横合ふ馬を入へし第一切ふを

て馬を入る事大きある僻事あり

かやうのときむい合て馬を入る

車を信むへし 竹中百箇條

一馬を入て敵の備へ固めたるを

倒す車ありするの馬は駿足系年の

達者を撰ふべきあり 騎士用本

一 小攻合のとき敵やり立てはふといへる

後に或の馬に系或の馬を眼に引付

ゑときの馬を入ると知へし然るとき

味方も騎兵を備へし眼を出し是

軽を先かくるあり大軍のときも

互に間を隔て備へ居るに大物見
中物見の来る時の味方も騎兵を
彼へより先に出して立並足将を
かくるあり 軍鑑極要集

一馬入るの小迎合の時の備あり
あり大合戦に馬入るふとりの
不穿鑿ふり敵の根子を見届よき

武者をそらへ敵の中へ左右より

兼込敵の備へを乱さんうため馬入

る備あり是の徳あり

ある武士の後場あり申陽軍鑑

に馬足輕を後して徳あり

車あり 戦切之巻

一馬を入る車 騎士を撰ぶ車ハ勿論
小して尤も馬の勇驛あるものを
先たて切をなすへ 敵の騎馬

搦で整正なる備へに入へるす必
らす入車も引車もあらずして
討永る車有りよき目當とりよの
舊陣ふして馬を縦横小立根り
うまうまき備へを見の文字に馬を
急に入へる必崩るものあり又何
ときも敵をうす不清るやうふと
立廻るへきあり馬をへ受る時の
勝利を得繼一十騎の馬も馬をへ
敵を受る時の五十騎ふも劣るもの
あり百騎も一騎も勝負の理目然
なりみうりある備へも見えすして
やむ事を得す入るときのみ計
らひの右の先へ横合に馬を入へ
第一切不を並て馬を入る事を信
むへ

竹中百箇條
幾記抄

一馬を入る一戦の間一二所より上^外にての
何たる功者ふても叶ひあり大方
の二所以内ふして十度小七度の馬を
入^りこゝのあり遠^くれの足場見えぬ
おへあり但し頂高き馬は無用か何
ふも頂下り地低ふる馬小越す車
ふし惣別軍馬に頭高く何ういふ

の足元を見すして大事の節必ず
不覺を取ものありさて入やう左右の

眼と向と三方より入で一方ふあひ

左の字と右の字に入 左右の字は大輪乗して
談合めときめ相詞あり

十文字に逢う敵味方の色を見て入

るこゝのあり又敵より馬を入ると

見の大事しと心得へし入馬来ると

見て間何らの疾砲二流立にして間

七八間ほと足腰より志さり馬上の

この下立て平地小折一き、鎗先にて
地を叩き、鯨波を揚て、若小備ふる
軽平一同、鉄砲を放ち、勢めと少しも
立阿うるま一きあり
戦記抄
井諫記

一、敵陣へ馬を入る入るとき、時の弱備の方へ
乗込へ一かやうのとき、時の合標の馬
禮をうけ、或ハ長刀二振を箕の子に
但合せ障泥の緒にて、結び縦横に

○掛立へきあり 軍法義彙集

一、馬働子、三箇條の車一子馬入、是ハ小
迫合に、其地形を見て、入る車二に
無りきり、是ハ小迫合、小敵の引取
とき、歩者あとへ下り、或ハ丸まり
退く間を、乗割る車三小乗こむ
是ハ敵陣、永にみくり、此取を見定
め、或ハ敵城へ乗入、速早に引とる

へきめのり
事 武田戦功物語



一 犬とへハ一人騎馬にて引とき先に
て敵大勢ありて通られさるう或の
残跡へ用ありて帰り渡とき左
右池沼ふとにて道の細く何共戻る
事一成さるう或の橋ふても一騎うちの
せもき橋へ乗跡へ返すとき
車さるのとき常の子綱あつたの
結ひめをとき左右の口緒子の尻へ

通して子綱の先を左右ひとつに
来て跡へ退らすへ一幾渡も口を
ゆるめての志さるうかすするあり
馬の口ろくふて成程狭き一騎う
ちの道にても輒く退らすもの
あり常く馬の退口を覺えさせ置
なりすねさるう奴馬の志さるう中さす

又口こもき馬も志さうりやさす為に
よく口をこ入て志さうりを付て *志さうり* 松
へ *軍鑑要略*

六十一
戰場
三
卷之五十二

三

三
對檢
御
跡
三
三

馬誌卷之六十一目錄

戰場部

六十一
卷之五十二

戰場部

三

戦場部

一司は大坪流に雲霞の巻と。いふ傳書
 ありハ悪馬の取扱を記し。たるなり
 又若草の巻といふあり。これハ駒の
 飼やうを委く記し。たるなり。これらも
 皆用になつこと。あれハ傳し。をく
 べき。その他五御の傳して

常御、軍御、相御、禮御、醫御、これを五御と
いふ、それらも傳へ置ハ兼くこれに益と
かりあり八條流安驥集といふ傳も
あり第一に療治馬相飼やうまてを
述にらゝのふてつられも古代のこと
多く残れり心を読みてこれと讀て
取捨す一兵談にもいふことも馬場ハ
古し今と相遠したるやうに見え
大坪流も古し大に遠ふやうの庭兼の
こともハいづく傳授あれと馬場兼のうら
さのみ是ふ一是を以て見れハ佐伯村の
芝原にて騎射の稽古をすらうよ一さしてハ
嵐山にて鶉逐の進退小金原にて馬勢子
のまねおとをして馬を自由自在に
兼りををしたのの
馬数あることもハ敵軍ハ馬の入れやうの

車をもかき鳴物の音をも聴せ兵器
とも見せまじハ犬追物ふとをて
見ら車尤よハ犬追物も今ハ熊本侯薩州侯
の外ハ稽古も聞す勿論かの二家にてハ
兎草まても戯遊に犬追物のまねを
そつて傳授も秘事ともいふぬよ
惣ての車ハさにあつたきりのあつ

右やりの車を仕覚ゆりハ鞍のつめの
仕やハ腰の綱の車ふし傳授さまふあれ

其よハあハ試みハ用ハ
自の會得すハハまハ牧師の
馬を乗やうにハたきりのあつ

早牧子曰ハ當せさる君にハ文武の
此嗜ハハけ深くまハ
亂軍騎射の稽古あつて犬追物を
常にせまを給ハ犬を鞍に繋ぎて

縦横に道なき處までも驅行を逐て
射るるををききしめたるふかあり
かきし心入ありまき世の馬を仕るに
鬣を截ち毛を焼筋を断爪を剥か
て唯外貌を飭り事をのみ務るハ
悉く皆馬の天賦の躰質を損ふこと
のみにて其才能を盡さしめす大に

害とありし事あり軍用には必ずす
野馬のまきにて用ひたることあり

まき牧師の野馬を捕へたり一條の繩を
馬の背にうち掛て鞍鐙に代へそれ小
跨りて縦横自在に馳廻り堀を躍り
水を涉り涉藪を潜り險を涉りて自己の
身躰と一板にありたることありにみあり
りのまきハ曲馬の雜戲をす者者の
曲節に應じて馬を自由に使ふ類にハ

武士の及さる事も多きやうあり是ハ
たゞ徒らに師傳の舊法にのみ拘りて
實際に意を用ひさる事あり馬術
家の相傳に鞍下に馬ありといふ
よく思へば今ハその鞍をも忘れて人馬
一躰にありぬハ術の本旨といひ難
りり——況や其他無用の論説をや

思慮事なきこと事に

馬新論

一 三浦人々小坪合戦事後
後平實光にいひけりハ楯突の軍ハ度々
志事これとも事せく事みの軍ハ事れ事始め事
事やうにあり事いひけりハ實光
中けりハ今年五十八にまうり成り軍に
あふ事十九箇度事に軍の先立
實光にてあり事歌も
弓手我も弓手にありん事なり事

こけるを引へううすあきまを心にくけて
ふりあかせくして肉ふしをとりんを
あゝ矢をいどと矢をもらふうう矢を
たむひ給ふ一一矢一ちちてハ次の矢を
いよきうちくハせて敵のうち胃を心に
うけ給へ昔振ハ馬をいりやうハせざり
けれとも中るようハまづ軍馬のふし
をいづれハねおしさせて歩立に
おれのれハ子やすきなり又近代ハやうも
ちくおしあて組て中に落ぬれハ
太刀かたふにいて勝負ハいあうととそ
中ける 平家物語

一大坂陣のとき、馬上の鉄炮おいて見す
一一して天満の後にておひハ馬驚き
駈出ハ中につき、騎馬のりの物前に鉄炮ハ
百騎の内五十騎とハ持中さすハ馬上の

弓ハ馬々々ハ中々すすハ一々もこれも持中
さすハ弓足煙疾炮足煙もろりの備へに
持せハ 長澤聞書

一大坂夏陣五月五日の夜真田左衛門佐幸村
道明寺表に陣を取て營法軍令嚴重おれ
敢て侵掠すくくす明きハ六日の早旦
野村邊にいっくう坂邊内藏助たすハ幸村に先きて

水陣に向ち勝成と戦ふハ深々子と負けれハ
人衆ハ脇に引取備へを立直ハ幸村に
使ひをせハハ貴殿の一助請所おろくハ
幸村ハくくくきのほと目を驚くハ
いより我等請取ハと返答して軍をす
むしハ伊達政宗の多兵ハくく幸村の
地取ハ前後ハ岡にけ岡の上平ハあり
中間十町ハくく早くして道の左右
田疇に連ふれハ幸村の先鋒岡の上に

過半推あげしを政宗の騎馬銃
八百挺を一同にどつと拵放ちし
騎馬銃といふは伊達家の士の二男三男
壯力のものを擇ひ奉りし仙臺の馬所あり
駿足をすくくして兼し奥州に所々の
戦ひに馬上より銃一放ちと定め
拵するに中らぬ玉の稀ありけり拵
たられ敵の備へ乳々を銃の
煙りの下より直ちに兼し拵し
馬蹄に蹂躪せられて敵敗績せし
事ありけり騎馬銃先手より
一二町も前に進て連發するに鉛子の飛
電のこゝろ火薬の光りの電に似たり
煙りの忽ち雲霧とありて丈尺の間も
見え分すされ岡の上に推あげたり
幸村の兵士多く死傷したる

砦玉話

一 古人の云く戦場にをいて馬上にて敵と
仕合ふ事ハ稀かり馬上にてハさうさうき
自由あつさるりのあつとつり吉田の
せり合に小菅^み厚石^み曲^み淵^み过^み長坂十左衛門ハ
各馬より下り立て高名あつ廣瀬ハ馬上
ゆゑに人を討すといつ方も是あつ板垣
大物見のとき原英濃^の送足^の煙に出たるに

敵付て来りてを原^の敵^の近^のにて馬より下り立
槍を取て四騎突て落したる是英濃守

五十の歳^のあつ馬上と歩士と戦ふんにハ
馬上に利あつときもあれども歩立て
致さすしてハ實の高名ハかあひ^のき
りのあつとつり

前橋舊蔵圖書

一 福田内膳或とき大子の屋敷より荒神町の
長谷川夫玄清う所へ責馬に行けり一人
南の方より走り来り追々其者人を殺す

逃れ早くとめられしと聲々によきり
福田馬上あり城ハ歩立ありこれによきて
福田馬より飛下槍を以てこれに刺す

あし 碎玉話

一馬上の槍とつゝ味方互に物見に出る
ときり或ハ退口ありにて両方勝負する
あり必らず人を突へりす馬を突へり

其上我突車かりれ馬に突すりありあり
馬上の槍とて種々習ひありとつゝ

家々の秘事とていへるのみ好ま
りぬ事あり第一馬による一いかに
我手に合たり馬に兼手綱を能納め腰を
すく槍の中はとより少く石突の方を
持馬をあかりて馬の驚りさるやうにして
敵の馬の右眼へ我馬の頭向けいやうに急驚り
りあり我馬をかりけり鞍と鐙と

一 逃るを追ふハ馬兵に志くハあハ進退
迅速敵を駆破るハ騎兵の力あり騎兵の
用ハ別徑奇道を知り伺候を便にハ
敗軍を継ぎ糧路を絶ら煙便あり敵を
討に利あり十騎ハ百人を走らハ
むハ平地にてハ一騎ハ歩兵八人に
當り險阻にてハ一騎ハ四人に當り呂望の
六韜にいハ騎戦も亦歩戦にもさる

ことありん 騎士用本

一 味方一つに成て行と事ハ五間三間ありとも
同勢をともおれて業ハ一ハすむ群衆より
見て目に立りのあり 竹中百箇條 下同
一 味方と押あはひて敵に向ふと事先ハ
行人にあとより言葉をかハハハハハ
我馬を乗越えハ物を以ハハハハハ
言葉をかくりと事先ハ誠ても詮ハハ

軍すき^さてせん^穿さく^隙のとき其方ハ我
跡より言糸を^掛かけたるといふ^時越る
詮^同ふ一言^同け^同え^同か^同す^同

一 衆切とハ敵の引取時分^同か^同と^同に^同形勢^同ま^同よ^同に
是^同ある^同を見^同切^同敵^同を^同追^同散^同す^同を^同さ^同す^同を^同衆
切^同とい^同ふ^同あり^同 戦功之卷下同

一 衆込とハ宿城^同に^同ても^同陣屋^同に^同ても^同敵の
板子を見時節を考へ油判の所を見合せ
よき武者をさ^同り^同一^同衆^同込^同と^同い^同ふ^同を^同い^同ふ^同
あり^同但^同一^同地形^同に^同よ^同る^同一^同 同

一 山城を責るとき足^同を^同頼^同に^同致^同一^同馬^同を^同早^同く
衆^同放^同す^同こ^同と^同これ^同あり^同 強 弱 馬の息きれ
い^同とも^同それ^同ま^同て^同ハ^同衆^同上^同り^同一^同く^同早^同く
下^同り^同立^同止^同ハ^同頼^同て^同い^同き^同切^同何^同事^同も^同詮^同か^同す^同
か^同き^同り^同の^同に^同て^同ハ^同兎^同角^同卒^同尔^同に^同馬^同を^同衆^同放^同す^同
あり^同あり^同き^同一^同く^同い^同事^同 幽齋軍禮書

一馬にて先をすす事是を第一の秘傳と
すりぢり互に槍とく合ふとなしれハ
足ふみ自由にあつさるゆゑにまゝりて
對くに成ものありまら馬のつら首に
槍届くところのま突つて馬疵を負て
驚き騒ぐゆゑに馬にたまふす馬も伏る
あゝ覚悟なき人の落馬すりありこれ^を

馬上の先の第一の秘傳なり 竹中百箇條

一義貞龜鑑に曰く大将の衆馬常にうちを

あつ今日能すみ狂まら吉事あり
必らず其軍に利ありつてまら常に
いさめる馬今日進ますハ必らず負く
つとつり 鏡鑑抄

一大将一馬を進るる味方負軍にて大将馬
放れ給ふときハ衆馬を尋ね早く進む
つとも一其馬勞れ或ハ疵を蒙るハ

我馬を進一奉るを大ある忠節とする
あり此とき敵慕ひ来らば或ハ討取或ハ
討死するとも大忠大功ありと云 軍鑑極要集

一 おく北軍に大将一馬を進らば長篠
合戦のとき笠井肥後勝頼公の馬
すまさをを見て衆付手前の馬に
勝頼公を乗せ奉り其身ハ勝頼公の

勝馬のノ中闘を^と取^りて敵ののり^り来^る
真中へ衆ハ討死を遂げ其紛の中に勝頼公を

一 何よりあくのけりあり是を頼る急節あり
家康公甲州泚入國の砌右の根子を仰出され肥後守
孫九歳にありと召出され此加恩あり 戦功之巻

一本多由雲守忠朝関原の戦に内記といひ十八歳
にして忠勝に従ひ出陣せし三國黒しし駿馬に
乗り嶋津義弘宇喜多秀家より大軍と戦ひ
たゞに嶋津より大砲を放ち忠勝より馬にあたり

馬忽ち斃る梶金平勝忠馬より跳り其馬に

忠勝を乗せたり敵兵是を見て大将あり撃

つと十四五騎をせしめ忠徳を圍戦ふ内記

無双の大力あり父辱しめらるれハ子死す

つとひて一番にせせ敵二騎を斬り曲りたる

刀と鞘の初帰に當てをす一重一猶戦あり大三川志
小倉氏園屋記

一城井の一戦に三浦六之浦ハ黒田長政の馬の尾を切て美を

退くいめこと尤重あり義あり一珠に此のいことこの
他畧すくれれたる心得しつと一古来より

主人の馬を追殺し主人討死にあはるを

示すためふれハ尾を切こと禮あり已に

鴻の臺の戦に里見義弘に安西伊豫守已れ

馬を奉りて其身ハ歩行して供けり

里見ハ馬の鞍鐙かけたる陣中をかけ

まいるを見てさしてハ義弘討死こそし

木思もひて里見ハ隨兵過半討死をこけ

たうとそ物事の窮理うすきし時ハ
思ハきりに失ありき俊あり
前橋舊藏聞書

一城井谷の合戦に黒田長政の人数大崩れして
逃る長政も馬を深田一乗込ふにとも致し
方かく左右にてハ敵ひくくと追付味方
多くうらき事ありに後後又玄清
政次ハ奪取の首一つ捧けり左の身綱に持流

黒母衣かけて月先の馬にのりて一文字に
のり切て長政の深田一乗込居給ふ服を通る

長政見ていりに後後又玄清にハかきこいつ
く一遊るそハせくハの志ハ給ふハ後後
きんと長政をありハ見えて何とて沛馬ハ
捨て引ふされきりやかやうに崩れ立
たる人数何と成りのよハやハいひ捨て
しを通る長政の馬ハ大龍とて九州に隠れ
かき名馬ふりけれハ敵の身一返してハ

口惜し〜とかりし捨うね給ふ(並)菅和泉守
政利来たり長政を見付急き飛下り私馬に
召し〜して長政をい巴う馬にのせ糸くす
長政のいふ何〜とて其馬を沼より
上て来りし〜といひす〜退き給ふ和泉守
心得し〜とて跡にの〜さま〜引上見けれ
とも大馬の鞍化まりて落入て中〜五六人
かりし〜も引上りし〜けれは況や和泉一人

い〜に〜も〜か〜す〜と〜し〜〜さ〜ハカ〜
〜とて右の澄を片足切て持り〜り隠ふと
存〜り得共此馬上〜り〜さ〜り〜澄を取て
糸〜りし〜い〜皆〜兼〜り和泉守尤あり仕形
あり馬を敵に取奪ハれさ〜りの證據あり
よき〜も〜計〜ひあり〜と感せ〜あ〜り〜と
あり

武邊吐聞書

一 栗山利安ハ相良の城を預りて黒田如水

寵臣ありしう儉約あり人にけあし
事によりてハ金浪を惜ます武道の心入ハ
深うし人ありけれも人の價い貴き
馬を買りのあれハささるりの馬も二匹の
代りハせぬと誠しめしうし車ありし
竹中半左衛門重治が云く分に過る價ひを
以て馬を買んと思しう五兩にて求るが

よしとつり粟山も竹中も名ある功の者
あれハ其言葉大に味ひありしと思はるハ

予今實事に試て知るあり 厩馬新論

一 謙信戦ひに臨みて俄に人衆を分んと
思ふし馬を部隊の中に入れて八字十字に
分らるに其馬の行ありに左右に分れて
よのつり又部隊ありし

碎玉話

一 庚子の役に虫羽國最上山形の初瀬堂(上秋
景勝、老臣並江兼継おとらふきいし最上

出羽方一政宗より加勢ありて双方大に
相戦ひ手負死人あけり^{かき}ふ^{かき}は^{かき}是に
よりて最上方より里見越後を以て人数を
揚させけり越後衆巡りて下知すといふも
何れも用ひず爰にをいて越後小高より
揚り詳りに極子を見切^て家来里見内苑如松越
他石湯門とある人に談合し間を截割にん
にハ引揚りに利ありとて僅二人にしてあの
間を打^たし^し兼分りを見て双方引^きられ
たり此日越後馬を三疋衆倒したるあり
是九月十七日の事なり是に^よりて並江も
兵を入けり^とと^と前橋舊藏聞書

一淡川弾正ハ一揆郎等を集めて中けりハ近邊
丹生山の一揆を秀吉賢し謀^りて追落す
此上ハ尚城一押寄り四五日にハ^さす
されハ天時不知地利地利不知人和とい^はり

志^り大敵を交利を得ん^る事^は地利^も
肝要ありいさお出で敵を防ん用意を
せん^とて五千餘人足輕人夫三百餘人^も搦^み
其外普請道具を取持せ日々に城を出敵の
寄来り道を掘て切落^しと^こら^ん或ハ
馬さくり車菱をまかせ逆茂木大綱を張せ
けり^り知る^に何者^もいひ^らむ^に今朝^は彈正城を

虫油^を以^て普請^に付^りし^に勇^ま吉^に
告^げし^に大将^小勢^にて^は城^を出^るる^に天^の

與^る事^{あり}と^て舍^身秀^長に^は百^餘を^授け
二^子に^分れて^は押^寄し^て堀^切馬^さくり
車菱に^は入^られ^少く^は深^くを^淡川
一^揆五^十八^人す^くは^て切^て掛^り彈^正う^け
塞^り各^にハ物^り付^て狂^ハす^る敵^數千^の
中^ハ僅^四五^十人^馳入^何程^のより^と仕^出す
一^き我^名譽^の手^立し^て大^敵を^追拂^ひ

末代の物語にすゝきろふありとて足煙共を
近辺の在郷へ走らうと陰馬一疋引て来ん
者にハ錢三百文つゝ與ふ一と一言觸りれハ
時の間に陰馬五六十疋引来る侍共彼馬の
口を引大勢の敵に赤向い道の廣みく
押出す勇長是を見てあれほとの小勢
かゝり来らハ敵死狂と覺たり馬強かどん
面ハ其方よりけ倒し馬に踏せよとて
究竟の魚武者共馬上に槍を提け衝を
雙一既に駈入んとせしハ彼陰馬五六十疋を
散々に打ちき立閘をあけ一度に敵陣に
追入けれハ數千の兼馬是を見て剣廻り
左右に立ち躍りて倒し十方に黒煙を
立ちくろひ廻りけるほとに馬上に一人も
たまり得ず皆倒され我持る太刀長刀に
突貫る者多し斯のこゝろ散亂せし処を

彈正時分ハよきそ切崩せとて一族若黨
五十餘人^討て^ハ亂れ合行る三百餘騎切
まられて散々に引退く 別所軍記

一 星備中守曰く我若うり〜とき度小せり
合に出て追馳追思〜互に馳引の位を
見〜に初ハ合急行す〜て行をまきり
た〜り多〜一縱ハ敵ハあ〜てぢら山の

上に居り此方ハ下より馬にて乗上るに
我〜と進まず〜し事あり〜心得あり〜て
先〜ら〜進む〜ときハ敵ハ待て居るは〜の
事ありハ必馬を乗付ら〜とき敵やり〜を
追取て頻りに突てか〜れハ馬ハ上り坂に
向き捨ハ取直〜悪く〜てさ〜ふ内に
不意突崩さ〜りあり度〜い趣を〜ら
〜ハ馬二匹頻りに先〜進み我も其馬
同然に乗付て行内に少〜馬を引す〜ら

心にて二疋の馬を先に進めしむるは必定右の
こゝろ突まられしあり其とき我詞を
うけて拙し何とて退く退きして見せん
兼くより手綱構ひよくして槍を自由に
取廻し度く利を得しありしあり
按するに功の入らざる武者の物語あり心得
あくして進むは退く前表ありし進む
にも必持ありし此備中馬ハ少し跡に
立ちやうにええけれも肝要の事
詰んと思て扱えしゆ先二疋の馬退て
備中守ハ利を得し是皆きをひ負て
古よりありしあり若武者の智恵の付
し所あり 翁物語

一 古老の物語にいく神南の合戦に山名時氏
お負て軍兵とも方より落ゆしけるに
將軍義詮の勢追詰討取ける内海十郎範秀

とつふ者逃る敵をあまき〜と追行て敵と
多く討取太刀を銜り〜とやり折おぬ馬ハ
手負て膝を折一足も進まず十郎下り立て
放れ馬あま取て衆人と見廻〜けるに
誰とハ知すさ〜やうに出立ける武者一騎
三引あのみぎやを付て〜せ通るあ〜れすき
敵やとありひ内海十郎馬の三頭にい〜り

飛衆敵と二人馬に乗らり敵ハ是を味方と
心得て誰にい〜か〜すり〜手負あ〜ハ我腰に

強くい〜抱きつき給〜助け奉んと〜い〜れハ
悦び入侍り偏に頼み奉り〜い〜も果す
刀を抜て前あり敵の首を切り落〜猶
其馬に乗並りて落行敵を逃〜けたらハ
機轉の事〜〜覚え〜

古老軍物語

一 朝鮮の陣に漢南勢陣一新〜糸られい〜ハ
あ〜夜明すせの刻〜〜い〜物陣も

寐入物音少〜も是あ〜そ〜にして清正
中〜れいハ一段よき時分にていそ衝の音
高くの間路〜手拭にて巻り〜と中〜各々
衝を手拭にて巻音のせ〜やうに〜
少〜い〜にも静〜と本陣の方(清正馬を
乗込ハ大将の本陣と覺〜き初に飢燭〜
か〜こよ燈〜さ〜少〜つ火のり〜え

中〜所も師座ハ其〜ハ清正自身つ〜入ハ將と
清正自身一討に討れいそれ〜り〜

より出中唐人を各々討捕本陣に火を付
又眼〜かあ〜こあ〜に火を付焼立関の
聲をあく漢南勢十万馬騎の大將とハ清正
自身討取〜り〜呼ハ〜勝関をあげ

られい
木村又藏覺書 征韓紀略
朝鮮太平記

天如上人の遺言に
一、法を以て人を知るべし
二、人を知るに法を以て知るべし
三、法を知るに心を以て知るべし
四、心を知るに徳を以て知るべし
五、徳を知るに業を以て知るべし
六、業を知るに縁を以て知るべし
七、縁を知るに因を以て知るべし
八、因を知るに果を以て知るべし
九、果を知るに報を以て知るべし
十、報を知るに徳を以て知るべし

天如上人の遺言に
一、法を以て人を知るべし
二、人を知るに法を以て知るべし
三、法を知るに心を以て知るべし
四、心を知るに徳を以て知るべし
五、徳を知るに業を以て知るべし
六、業を知るに縁を以て知るべし
七、縁を知るに因を以て知るべし
八、因を知るに果を以て知るべし
九、果を知るに報を以て知るべし
十、報を知るに徳を以て知るべし

卷之五十三

六十二

戎傷四

四

子

對位

神書

甲一節
九

讀五節

四

馬誌卷之六十二目錄

戰場部

春
正
下
日

四

戰場部

一 凡そ軍馬ハ朝を夕を及し別して飛奔
 自在ハ紫入へ一馬ハ人とおあひひて天地
 に生むるものにして六畜の宮女上なきハ
 威應ありてよく主を知らるものあり此
 故ハ右の教を可とせ武士たる人の常ニ
 飼ととりけつるをハ世に事とせ

戦場
イカ
力

一

凡そ戦場ふして第一といふ
べきもの馬を我を我て敵よ

さし人馬術要覧
武馬必用や

國ともなく翔來て元親乃命を救ひけ
しそ外古今の奇特あはて年か
すかろ神妙のものあれは實に心を
といて驚かすやうの事もある後か
さし人馬術要覧
武馬必用や

一
不整をれ既馬に危時くりと時き時急時なる
名馬に告ていたく今日危時き時と急時なる
勤され時ある時いひて別ち一鞭を
叩時帶時多時馬時俄時勇時み一時逃時小時檀時溪時を飛
越時之時難時を過時る又元時正時に時三時四時國時の時將時長時多
我初元親時有時後時戸時次時川時そ時得時津時と時戦時
小軍時彼時走時人時可時散時亂時一時將時既時小時必時死時見時
元時一時と時内時記時是時と時い時ふ時名時可時主時を時知時り時て時何時

向ひ強引其心より随ひ我力より替り
て主と輔くもわたり其申より五性
ふくくして持まりき馬あり又
五性くもよ忌へきものい駿馬示して二毛
の馬とを示してつゝ軍陣より大示してきよ示していむ
つ白示して二白位牌白示してい其主必ずす様
難よあふ五齒の馬い主のふよ害
あり夜目の二所志ありきい大将分

の人方に忌へ〜糶毛の事い初
あるをい敵分と名つく〜これ苦
からす後にあるを方と忌へ〜
凡そ武道と心と意て軍陣に名を
顯さん〜するよ馬の鍛練なる
あるへ〜す此ゆへに馬と替古
するよい〜下〜手綱の守と口傳
あり馬の百癖の別と又療治の法
あり若〜と形〜と覚たらん
輩は口強く驛〜き馬とも好む
へき〜や武者奉行物見は殊更ふ
馬とよ〜鍛練すへ〜口傳
〜や〜過〜る馬に敵地強〜み
て大死〜すする事あり其たあり
少〜す只主の心と従い手綱ふ
意〜て八方にかけ引自在なる

馬と好むへ〜其中に北條氏康の
家老より北條左衛門大夫い大剛の
覚ええある者たり〜下野の小山にて
百騎計より計の武者の中へ只一騎
より計八方より強迫〜よき敵
二十騎計と交倒〜其勢いに
雜兵百四五十計と旗下
の者より首を取せて残る者共を追

馬より行り〜馬の大
小も人より〜所より〜あり
一概より〜好悪と論じて〜す

本朝武家根元
軍法卯者書

一或老人語て曰中國の侍中三輪とい者何
高麗陣より敵を追駈り上りて思ひまに
切るたのなまを怨を納めたのなまを
おあり敵の肩先を思ひまに當て敵の言を

出るを能う刀の輪さくら右の膝か当て去こり
 切れて終はりひつりかり後はみまきして
 執しつたる上のままの飛はり若武者
 又まの入所ある一といひて是を思ひみせ
 道は長一とる人み若武者の尋ね問しき
 事肝要あり或兵道老人の曰く可上りて
 人を切ひ片手取ておみ討はりおくすた
右ともよ阿が切の運手切る又帶

ひ切もよ一といひり右の二輪の阿が切の引
 合せいし感懐深一或関東の老人語て
 曰く関東の馬象形の名人阿が切水谷流尉
 入及水谷母とり者人の馬を指南とるみ
 小庭を肝要を案て曰く当世馬を案を見
 るみ長馬場をり肝要を案て事無き教
 たり互の馬上にて人を切るも可上るをみ付
 て世をころくの事をせ付ぬい自由あるさる

そのなり其上馬より歩者を切るは就中
浩閑き自由ありぬれ一系切られ長
馬場ハ何者も繁そのあり細く切巴一浩
閑きを繁せぬハ肝要のとすの達者ハ成難
し是よりして古より小庭を本として四
本柱を繁車右の種昔古のためあり只慰心
小鞠の庭を繁ホハつてはと語りとあり子孫
の重子よく不変をきふあり 翁物語

一 使者の者大將の命を交先を合戦を始
め志起るよまの馬を静に繁出—十四
五間を出て後馬を止め先をみ取り口上果
て味方の勢氣強く敵の勢氣弱き條諸軍
は觸れぬて既ち戦を始むるといふ苗て
自身をよまをいふも一例あり大
將ハ中上ハ一の儀ありとすハ一兵ハ
軍法義葉集

一 何處の所の戦ひなり

源君敵地に入りて乍候をつりこめて地
形を見せしめ長ふまをた方深田あり
馬の足も立ち歸りて此より一を中上

源君陣に合もるとも志もなき所方
のつくりは小をとりよけれは戦乱も際して
い誰も我を忘れて馬を馳入を討るもの

何れも一と一の深佛思意にやあらふし夏れ
初め小で白き袴を著るなり乍候の士を

召具せられ深田のいこのこ此ふてゆとす
詞の下よりそ深田の倒れ入て腰の上まで

泥淖も然り及つて扈従の人々驚き走り
去り引上けなる陣中初といひついで

暫時の留小諸を共皆急なり合戦の時

きこいりて騎士とも皆自れ戒めて深田
の近邊にもよされは難なく去りたり

一 相見小出る、他の陣不へ佳番小引ときれ

ん得ありまゝ敵出でさ^速ま^り留人^時か

まはせ退くものあり馬をまめて時、輪を

索引来る一、自らの高名を柄をん敵敵

と勝負をせむハ大ある不忠不義ありまゝ

討死せハ大事^時此^時の使の役儀空くは

るのみありを敵の存院と成事多なる下

さやうの^時敵^時の堅固ハ引来るを物

見使者の本意とせむあり 武道勇御集

一 退きの難き不ハ伏向る陣を一、退^事き^事

私云く一騎相見小出て敵に小合難

儀ある事是ありさやうの^速不^りてハ馬を

急返し先く索て向たり、目^速かひを敵

一 相見のち振をせむそのあり徳るを

見ハ敵思惟して伏去かまう、何りて自

引の物見くと存せしむるは、赤い引きたるあり
掛り来るは、赤い引きたるあり
引きたるあり
兵法物見

一 伊達改正宗奥州にて敵とお戦ふとき家臣
茂庭周防物見小出て塚の上より馬を察せし
るしとき伏せ候ふ出て周防を撃取たり引
引へられとも引きたるは周防より勇ありと譽る

敵を見つて引きたるは、赤い引きたるあり
為見は軍の勝負ふかる大役ありあり
伊達家法あきとや周防は、赤い引きたるあり
伏兵のあるや否やの形勢を察するの道
を解得せしむれ君臣共々失ありといふ

碎玉話

一 馬の背を木上掛て、赤い引きたるあり
さむらゝのあり、赤い引きたるあり

け石突み下地へ突きこり見留のふき
地澤山とふく突ちこり帰る是ハ別人押隠
しやう是あきたう物見も所とも敵地
五所をうりも所何方までも道陰のあき知
まぬ来を伏せ我をうり一騎敵近くまうて
衆所委く見て敵追うけりよく衆退く下
右の伏せ山家来出れを見て敵も追さうとの

軍用心得之記

一物見の世者ハ言を常ニ其用を教へ常ハ
一騎物見つあき物見大物見中物見
ともに言の衆やうあり百達者もあき
てハ軍に於ひとあき事あり馬術要覽
一或老士の物語せしむハわかれ小田原北條
家に向つて数度の軍にあひうり敵
味方對陣しれときもあつて物見もさう
ハ先以て馬に飛疎しそ不注案内を志す

功者功者を専専らりしを物見の武者境目一案出一
 その日の氣又を見合せ強ひを越え高高く下下
 案上敵此軍機をたより急き帰陣を
 る事ありされハ大將軍出馬一対陣を
 たると時ハ敵も味方も先きの役としてあま
 入れハ是程共境目一引系不臥て敵を一
 ひ吃つ吃ま吃にハ勝る是を専専らとも思ひ一も名
 付一ハあはれ系盡まで残る事あり是を
 知らしめお見陣武者さ一ひ目を一さ一と一
 草おこりて帰路を取きり討んとし其
 節もゑりしてハ馬達者をカと一那一山
 一も案あけ一せ一る事一兼て案の内よなきて
 ハ叶一ひ一陣取の事一た一と一敵遠く水
 流一ひ一くとも大山の麓くるみの地大河の
 なく森の陰より一る凡切水一を一魚鱗
 窟翼一陣を一かやうの儀ハ武者素の

不知をいひとも物見の了る事
 あり一者の陣にも壁壘をあつとせ是
 則ち勝へきに戦ひ勝すあつにあつはさる
 流術あり天三十二年秋佐々義宣と北
 條氏並下野國よをいり對陣ををり東西
 一旗をあつひくあつ氏並旗あつを五騎
 境目あつの境目あつ敵の軍機を
 二騎ハ下野の案内をあつ存あつ境
 を一町をあつ言あつ上る敵の
 弟是を見て蜂あつおあつりて二騎の
 者をあつぬあつ網あつ魚あつのあつこ
 右邊の敵地をあつ敵地あつとい
 とも北方をあつちあつて希あつにそれ
 場をのあつをあつ起あつる菊
 共逃れを追ひあつ首あつとつ

五敵あましく追かくるといふも馬達者あり
也大山へ乗上り嶺をとり味方此地をせ
付しう彦十郎ハ敵にかしきられ落き
くさく敵陣まぢく乗入堤はひに
道阿方を兼て知りそれより南をせり
駒にあちちて露筋を陣中より騎馬
おろく乗出り一糸後上りおをえ切られひハ
常かけ討んとせれば鞭に體をも入る
二男之間馬を飛せられひのつて
すこハ馬ノ聲をかりてをせまぬ敷度あや
しく見えし終に討れしめて大河乘入
馬をおよせし居れば居に付ぬ氏並あ人の
まくらまの次第を聞石直感たすめあらし
諸侍感歎せむとよ事かしてあ人を
水茶にめされ仰せ出さる趣山上に右馬尉
敵あましく圍まれ戦場をなせしうのみ

あつて敵一人を討捕大山をこえ陽陣
をり事ん別して馬も達者なる由
軍中此登れ比類なき高名なりさて又
波賀彦十郎敵上取いふとて授とらるべき
也敵陣へ馬を突入堤はいふしは順路を
知て南を指して馳追へ上まゝ陣中より
あまゝは騎馬に出向ひ數度難儀に及ぶ
是れ樊噲の勇をいふひいふなりけり討つて
大い突入敵味方の目を驚かしいふこれ
岩に馳付事未代未聞の別の者ありを上
何れも首をいふしいふし右邊つゝ武勇何れか
まゝありありいふしいふし此度は勸賞とあり
て高井黒とて名馬是れ信州高井郡より
出たりきて又多胡河系毛と號せし上州
多胡郡より出たり此二足は名方に鞍置せ
引立市本に在りて高井の庄裏ありとありて

西人相並て一度に是を殊成す諸侍れ
を慮し先登を中めむ者馬飛疎をくして
叶ふハくすといふく弓馬の道をた考らみ
あハくハ 北條五代記

一 大坂の役

源君上杉景勝をして佐竹義宣を援け
志め孫少景勝を長杉系常陸に令す杉
原相馬を宣へて索出ハくハ義宣追まらる処
小杉系境の上馬を索上げ輪をこ返りけ
り景勝これを見ぬ軍一同横撃し
利をぬる境の所をこをんもあと思ひ大
軍進んで可ありときハ輪をぬけんと約せし
也ハありハこれを相馬の相見といふ所ハ約み
因てハ何ハやハもいふハ 史談叢

一 秀吉ハ江北志津口嶽して柴田勝家と合戦の
とき蜂須賀左衛門を召て仰せありはるハ

三軍の功の者^ハ、^ハ此の^ハこと^ハく^ハあれ^ハ是
非^ハ及^ハす^ハ。此方不肖を^ハ能見を^ハひ
あれと宣へ^ハ彦右衛門謹て^ハ法を^ハ上内
ふ^ハ一方便仕り^ハ必^ハら^ハ此^ハ不^ハを討破る^ハ事
ありと思ひ定て^ハさ^ハま^ハり^ハお^ハ景^ハを仕^ハり
山上^ハ伏兵あり^ハ子^ハ速^ハ新^ハ中^ハ海^ハへ^ハ一^ハく^ハ伏
兵^ハなく^ハん^ハ輪^ハ業^ハを^ハも^ハ一^ハ志^ハ一^ハた^ハり^ハ

某の馬^ハを痛め^ハあれ^ハ馬^ハを^ハ食^ハた^ハれ

山の上^ハ静^ハ

とあり^ハ中^ハ彦右衛門又^ハ少^ハり^ハて^ハ輪

業^ハを仕^ハ道^ハハ^ハ秀^ハ吉^ハ公^ハお^ハく^ハ見^ハ牙^ハ隠^ハひ^ハて^ハ約

束^ハの^ハや^ハり^ハ伏^ハ兵^ハあり^ハを^ハ思^ハひ^ハり^ハせ^ハと^ハ下

知^ハを^ハせ^ハれ^ハけ^ハる^ハ太平不^ハ忘^ハ記

一 志津山^ハ嶽^ハひ^ハて^ハ虎^ハ之^ハ助^ハ馬^ハを^ハま^ハや^ハめ^ハり^ハり

谷^ハ兵^ハを^ハま^ハとい^ハつ^ハる^ハ者^ハを^ハ所^ハく^ハハ^ハ虎^ハ之^ハ助^ハ

若^ハ軍^ハを^ハの^ハま^ハや^ハり^ハす^ハき^ハ敵^ハを^ハよ^ハて^ハ馬^ハを^ハ輪^ハを

は^哉はるハ見苦^ハ、おへて^ハあ^ハり^ハなり^ハ虎^ハ之^ハ助
や^{振返り}ま^ハり^ハ見^ハれ^ハ道^ハの^ハ照^ハり^ハ小^ハ言^ハき^ハあ^ハる^ハを
ひ^振て^ハ居^ハる^ハ悔^ハき^ハ河^ハの^ハあ^ハ何^ハと^ハ返^ハ答^ハを^ハま^ハき
と思^ハひ^ハ多^ハう^ハい^ハや^ハ、^破かれ^ハ功^ハの^ハり^ハり^ハ多^ハう^ハま^ハの^ハあ
れ^ハ味^ハ方^ハ小^ハ勢^ハあり^ハて^ハ追^ハま^ハら^ハる^ハ事^ハと^ハあ^ハら^ハい
核^ハ論^ハを^ハ入^ハん^ハた^ハめ^ハ、^ハ聞^ハぬ^ハ振^ハが^ハま^ハり^ハあ^ハら^ハん^ハと
返^ハ答^ハせ^ハ申^ハ通^ハら^ハか^ハく^ハて^ハ志^ハ津^ハ山^ハ獄^ハと^ハて^ハ一^ハ番^ハ論
を^ハ合^ハせ^ハ戸^ハ波^ハ集^ハ人^ハを^ハ討^ハた^ハり^ハて^ハ首^ハ實^ハ檢^ハ査^ハ
かれ^ハ集^ハ人^ハ、^ハ首^ハを^ハ兵^ハ古^ハま^ハり^ハ、^ハあ^ハら^ハ振^ハ出^ハり^ハて^ハま^ハり
ハ^ハ先^ハほ^ハと^ハ若^ハ軍^ハ者^ハを^ハや^ハり^ハす^ハき^ハ敵^ハ希^ハよ^ハて^ハ馬
み^ハ輪^ハを^ハか^ハら^ハる^ハハ^ハ見^ハ苦^ハき^ハま^ハり^ハい^ハひ^ハり^ハ高^ハ岩
ハ^ハあ^ハら^ハす^ハま^ハり^ハの^ハそ^ハ能^ハと^ハ見^ハ置^ハて^ハ子^ハ孫^ハに^ハ語^ハれ
ま^ハり^ハい^ハひ^ハけ^ハれ^ハハ^ハ兵^ハ古^ハま^ハり^ハ一^ハ云^ハの^ハ返^ハ答^ハあ^ハら^ハく^ハ赤^ハ面
して^ハ居^ハる^ハり^ハり^ハ我^ハ、^ハ一^ハ生^ハ覺^ハえ^ハぬ^ハ悔^ハき^ハ事^ハか
り^ハして^ハ清^ハ正^ハ機^ハ嫌^ハの^ハよ^ハき^ハお^ハり^ハ後^ハま^ハり^ハ度^ハと
語^ハら^ハれ^ハり^ハと^ハを^ハ 諸^ハ録^ハ鮭^ハ網

一 加藤清正高麗より帰りし夜の物語
森本義太夫と飯田覺玄津庄林集りて
高麗在陣数年の事何事小ても武功
小成入き道筋を見覺たると尋ね
はれハ何事是を珍しき事と尋ね
候もあ一但二箇條を珍しき事を今度
心得しや一を中す清正ゆて我も二箇條
の心算ありきありハ面も入札を書し其
實否を札も一とありて清正自分も
事書して別ち面一と見合せられけり各
一様不あり小けりともされどそを皆能
知りたりものあり或人のいへり毎山の谷
は芦の志後はねる不あり一その山上を押通
れハ唐兵三人向の山上日居て馬を乗り
と輪乗小様一人ハ腹こよ家世を
見てさてを相思の事あり小こそとして下の殿

芦を索りて求めはれハ内ハ伏兵ありき言
の素わうふて相尋の心紋しやうハ珍しき
事ありと心得ゆとありこれ之箇條ハ
そハあり 前橋舊藏傳書

一上杉輝虎の家老柴田因幡守治時ハ上杉
家ハて一二の人とチーニとありさう士大將あり
猶もいろいろけん系勝代ハ氣ハ遠ハ天正

十一年十月十二日謀反を起シ伯父の道喜齋
ト柴田トふ十君野とのあ城ハ陥るよ

勝直ハ度ハ馬を出され方上橋依ハ木川
ハ幡をよ云ふて烈き合戦ありて三年目
ハ力尽て遠ハ城ハせハ柴田ハ漆月毛
トハ名ハるハ家ハて二尺五寸の元重の古刀を
切て出敷業切伏てを刺ハくそ討死せり彼
漆月毛トハハハ白月毛の言ハ尾髪を
よく洗ハ草を刷毛よてひハ引ハ

年ばくしに紅の敗後よ紅の系にこし
言ふら白き馬のたゞ送しこころ尾髪紅あれ
いん事あり事いふをうかりそ一乱し井
筒女之助を馬を分捕して案をを見こる

人警歎して語りき
古老物語
武邊咄聞書

一 小田原城中扱よありけれ敵下世亭の関
東の仕置し強ふしとて奥州までとり

國への旋して帰陣し強ふし思嶠しと志せ
及ひけれ廣家朝長赤着山海の珍味
を盡して饗膳を上させ強ふ敵下世機嫌
快然として自ら拍子とり謡を謡かせ強
ひ多かり廣家よ向かせ強ひ我私蔵し並言
馬の中一足をとりきすし廣家の射御
不達者といひあきら中ふも案方の功も熟
めと聞く強し目利のほろをも非疎す
し我らの中内まれと宣ひ廣家をた具

一匹廐一匹弱しはるし教百足立置はる馬共
何れも名馬ありけり中にも月毛ある駒の
五寸をくりけりけり穆王の八足の天駒項
羽り千里の駒をともかくやある下ととみえ
けりをこの馬を下し賜ふ下と中とれは殿
下莞尔として此馬ハ吾別して秘藏する
不ありといとも廣家ハ望みおれんとて下
賜りけり翼日畏濟を出させ弱ひたるは
廣家より送り馬之百五十足餘出され

とく 安西軍策

一 相模國の住人朝倉能登方といひて關東
弓矢の時節教度此合戦に先をわけ武
邊に達せし者あり此人

もてやして弟いさひをてぬらる刀

さき々に世をバおもひたてども

とよき古歌を詠吟しつる如何ありたり

ひくんとほのむ鎮西より出陣のり騎馬の
ときいふいき心たまかせさる景然に東國に
をいしてよく馬に乗りありさていさば別ち八
郎の妻衣にをせぬのとき相おひりしを
こゆりにをちんてめよ阿ふまきの矢膝にあ
りてをえんぬ此故●をまがまんがたあまあ命
を先ふべき勇士はた騎馬に達もい言事を
り壯子等此事を耳に底よむむべし老翁の
況嘆息をり事ふれり満座みな感んを
志のしあす成威の作をやあつとさされ
治兼れこるひ足利又太郎忠經治川を
わさむとき弱き馬をいりてにたて強きに水
をふせりせよと知しころささし防り事
ありさてまゝ依木梶原り生倭摺事と
やう人い強馬にのりて治川の先陣
ころもゆいころ一徳まとも大海をわ

をい希まれ事一得をたもひて多矢を忘る
い名をふ名く名けていむ名く名これ人も馬飛陳仕
にや武者傍をに馬を名と名せ走る弓に弓を
ふき名夫を名あ名わ名と見えたりそれ馬に
りて遠路をぬ名く名足を休めへ名軍中にて
乗名の馬名上名にて弓名を名用名に立名人名と名あり
う名人名にむ名く名一関東に名て戦場を名も名る
端名さ名ら名わ名き名者名の名廣名き名野名原名と名あり
な名ひ名出名て敵味方と人敵をわ名ち名旗を
さ名く名弓名矢名長名刀名あり面得をけ道具を持
て馬名の名り名の名弓名を名こ名る名見名る名へ名く名に名銃名砲
を名あ名く名一名夫名は名ひ名け名聲名を名あ名け名て名あ
き名さ名ら名む名と名ま名ふ名い名さん名て名ま名む名馬名河名を名く
れて名志名さ名ら名む名れ名と名ら名ま名て名横名さ名ら名馬名河名山名
衆上四のかけ道をのり極を名と名い名せ自由を名を名こ
らく名や名う名くと飛陳い名く名一先陣名ぬ名さん名て

魚引達者をふるまひ勝利を得ん事を
専らとた^味かむ事にて山小條早雲^早教
二十一箇條の内にも馬に下地を達者小京^京教
ひて用の名總をバ種方せよと泣せり侍言
者馬は口とくま^一代の不覺假初此馬上
に名利を志違京方を公のけた^終とひ大將
よりとりよとも馬の口とくま^一をハ馬下^一の
カ弓馬の心かけあま^一指をさ^一山永祿
七年甲子正月八日下総國^一の基^一をい
里見義弘と氏康合戦此^一氏康圍扇を
あけて^一流をいさめ下知せ^一れ^一既敵味方
入亂れた^味ふとま^一多^一て氏康賀義と名
付^一る^一馬に棄^一一^一白柄の長刀
にてま^一む^一別敵を二十餘騎切て^一猛
威をふる^一い合戦に勝利を^一得^一れ^一也^一
氏康^一の^一疵^一七箇^一不^一汗^一さ^一き^一に^一た

刀無かりしやろがあへた侍はたまたま疵を
人賞賞して氏康疵と申しひり馬飛
此依ハ此前に候まら古への傍單ともあ
存する事にて山田尋ねあるべしと申は
秀康は聞石犬也とわきまこゝろいさそ馬飛
陳一のらへそむり此面氣こそそまかんで
見えろしと仰せあり犬也あつて愚老
七十に及びむ上のあるまじ叶ひやそく山田
まこと貴命辭しやさハ初て思ひあり
此在真にそそ直を学んで山田かゆ山
と用意はし私宅に帰る秀康は此見物の
こゝ馬場にゆきをかせ登らせ候ひ諸侍も
ハ此の上に並居りて犬也^{つまげ}勢毛の駒に黒系
緋袴履を著星甲の上に頭巾をあて白
袈裟をかけたせき山伏のまがさに出立夫
を負弓を拵て郎党一人を召くし徳を提

けさせ馬に赤索て由糸をく志づくと
あやませ軍陣に山下馬由免と申も海へを
可場を二三返させぬく馬場のむふに築地
の阿るを敵方と申るにゆへんて手廻を
鞍の前輪も赤索まゝにして馬を赤索に矢
をえけ聲をかけたるうちみ夫を二つ前後
ちさて弓をもちて飛つたり後者も皆さ飛
かひきて後者の先立てにらるを追かけ後者も
取て返せし我退りま馬も心阿るにや路を去
たひ来るをまゝと赤索ていつさへにをら也
弓を去る(飛を自由自在にあつてを廻り
を赤索に由後阿つて目をたもろく由海
岸のめあつても大也百にて阿るをよひけし
馬を志せぬをく赤索せ飛つたり由糸に候
まきの當時の由獲るとして刀は長刀をさし
そへてトエたり老後のたよひ出是に志づくと

深く悦びたりされども犬也入道すては老衰
 の病あれども擬陳の道あれはこゝを達者を
 ぶるまふ事もや^此ら^此の若きころ^此のさ^此を^此とい
 ひもやして^此人感歎せよ^此り^此事なり^此
 人識に老たふ犬なりと^此い^此は^此徳^此を^此解
 終ふこと^此を^此あ^此す^此馬^此の^此徳^此の^此は^此也^此
 一^此也^此 北條五代記

六十三
卷之五十四
戰傷

五

戦場
下
對後
澤去
梅揚

六十三

卷之六十三

五

馬誌卷之六十三目錄

戰場部

馬誌卷之六十三

戰場部

一馬の嘶車^{（紅）}厩の内又のひん出^{（紅）}して
 乗ぬ前に嘯の吉事ふりまゝ澄に
 足をうけ棄て後嘯う我家を出て
 一町の内ふれの凶事ありこ急^{（紅）}蕉の事
 を出^{（紅）}たるも同院あり其ときひんを
 弓子の服にま^{（紅）}さ^{（紅）}て上帯を結直

すへー一馬の腰も志め並す
へー一又馬の身ふるひするも凶事
あり其ときも腹帯を志め並一
上帯をも結並すへー一亦主も物に
けつ渡まつきたろの上帯を志め並すへ
まゝもふひる事も志あり其ときも
上帯を結並すへー一以後軍陣に
限らず遠方へ行るときも同断ふり

軍用記

一慶長十九年十一月廿五日

大津所掾茶臼山へ成せらるへー諸大
名も群急宗急一山歸りの節
將軍様より進せられたる黒猫毛の
山馬小召させらるへーとして山引ひき
寄せ相成山城の方へ向ひ嚙き山への
敵陣へ向て嚙く馬の稀まれなるもの

ありと上意あり藤堂和泉も是の
由吉事の吉中上る是も依て由機嫌
能地道一遍乗二遍召させらる諸大名
踏踏して見奉る我等若き時の
馬上にて鷹をも合せ鷹の取たる鳥
を馬より押へたる事ふとも是ある
今この馬をうりさへ乗取るとの上意
あり和泉も由強執ある由事と感

一奉るふり 大三川志
異本落穂集

一味方原退口のととき大久保相模馬ふて
退きしを名の志し誰やらん新下戸屋
草臥以後馬ふ乗せて給われと云は
とふ載せしひつれのおむすとき志うみ育
二人馬ふて退きし殊の外馬草臥し
ひつるあふ危ふき事に逢しを古き危
是を見下うまかやうのと時きの何とや

すそ必らす二人馬小乗せぬあまなりと
大久保治右衛門教ゆよ三河物語

一本多平八段長久平ふて馬足怪を
用ひやされゆよ玉達者を騎兵と
馬足軽と名付られゆ武功雜記

一忠朝の出馬のとき素馬乗すまひ
する事三夜に及びひ日る忠朝怒りて怒

街いづれをまゝへと下知しけるはとき

三宅軍兵清馬脇ふありなる忠朝

五音あーくれ作向のふりあをむひて

志のひの緒を結ひ切しり影色せ

きたる氣色にてお楯やうふるす時ふ

軍兵清い法めてい云まゝ必らす必す

猪武者の振舞阿るへうらすとや

けれの忠朝あは笑ひて念にや及ふ

とよ肉ふ一鞭くれて進みしうの

従者も同く續きけり 九六騷動記

一大坂復由陣に真田河内も備もいま

崩れず出雲も忠朝の大小怒りて

百里とよ馬に乗りて只一騎備を

棄投る 續武家閑談
太平雜話

一合戦のとき馬をこゝ離せの必らす倭

混乱して崩るあり賤山獄坂の上

の合戦も利家子息利長の備も崩れ

たるも旗本も馬をこゝ離して備へ

散礼して惣備へ崩れありはとき

今枝宗二とよ旗奉行討死あり

寛元聞書

一大坂も堀尾山城も寄口の備を

上杉景勝内松原常陸介見て云

堀尾も備の後より崩るへこれ

裏崩とよもめありといひ

果して後より騒き立てけりこれの
馬を逐く計付たるを見て馬に
袂砲の中らんふの馬必らすまね
合へきを以て裏崩志つへくと見積
りしりしとそ
續武家閑談
前橋舊藏聞書

一 元和元年五月六日小井伊掃部政藤
堂和泉守の人数大勢討死仕ゆかへ
心此の由先年あらずゆ是ふよりて

此の本多美濃守小七日の由先年を
作付られゆへ美濃守備ふの馬を
遠さけるうよきとりふ事を知ら
まふかへ小馬をさけよしく自身ふ下
知し馬をさけさる者の手討に
すへしとて長刀を抜杖ふつき居ゆ
かへしと馬を遠さけゆ丹羽五郎左衛門
其所小糸見ゆて是の如何やうの

車ふて山や世合競ふ馬を遠さけ
てい草卧て何とふるへさうすんと
馬を引舟やすへーとやされ山やへ
又馬を呼おせや山とてあしへ
糸山節越前勢七十騎不と兼立
馬煙を立て競ひ来り山とて押
ちらー押たてられ山野采女な
まの唯一人ふあり下くかかれ殿ふの

まこりかーこふしーや内ふ大坂に
火の身見えや山やへ何の車もなく
身ふ逢ひやされす山馬の遠近西に
より人数ふよりて心得あるへさ
車ふや 寛元聞書

一 大垣の城に戸田肥後守氏西の今め
伊勢守の祖父あり部屋住のとき
左門といひー入部ありて親父

采女正氏信と隔年に系勤交代
あり城下より西の方一里ありあり
下荒尾とよみ廣野あり関原の合
戦に勝利ありて

権規椽由本陣を居られける獨立
の小山あり岡山といひ一其とき
よりあ^改めて今の勝山とよみは山の
邊ありは荒尾降にて肥後守三十

あまり左門といひ一と^改て鞭あり
一其時分ハ家中に簡略とよみ事
ふきにより三百石以上の馬を持知
行高の若ハ三疋五疋も持一により
家中に馬數二百五十あり近習の
若ハ城の馬お乗り騎馬三百疋を
是を二つふち一方ハ肥後守一方ハ
由舎守は名失念了す先祖の足輕

二十四段是も四方へかけ持筒持子
子明段は糸の足輕をの城下の火車
其外の用心に残し一家中の若所方
の若も家を明て見物ふおへうす
家の人數半分つゝ糸るへ一重て
まゝおし一残すもものに見すへ一
とありさて其板子を聞に馬上何
れも陣羽織こ小袴を著し一大小を
さし志ふひ一本つゝ腕板を入れ子
綱に持てへ上下とも袖下を付る
肥後の方の赤き九曜星の中舎弟の方の
黒き九曜星あり足輕いにいめ単の
塗笠茜木綿の袖あり一羽織をさせ
肥後方も後宿の袷小袴羅紗の陣
羽織赤地に金入の化粧袴朱のさい
幣いを持給ふ旗奉行二人旗のもの

二組に旗をさくせ西方へかりて大将の
後小備小荒尾野の東西へ多りてまづ
双方一同に興の聲を揚る見物
何万人とよへーこれ共小鯨波を
揚るにまづ城下までもさえさりし
よ其時の次馬上にて中知を大た
まひーに鉄砲を両方より放し序
段々標に標に進みお早合ふて
軽子をうつろひ七放つ早者ありり足
腔ハ空徳を腰につけ弓をかいこみ右の
手ハ矢一本つ持おさめ矢聲をうけ
矢を放す鉄砲ハ同然小進み出る
鉄砲終りて物次中知して弓鉄砲
ともに聞き退き横を討めくめり
鉄砲ともに備を立て見物する長
柄槍ハあハ足ハ神閑くハ双方より

馬上にて棄出——志ふひ亦あり互
に入混り追付追廻——駈抜け駈凌ひ
聲よく名棄りかけてたゞきあふ馬
上不達者にて落馬するもあり馬を
はよく棄てもかけ出——或はきれつ立
つ或は木の根葛うつうにはまあつき窪へ
ふみ込馬倒れて落るもありたゞき
落されて落馬——飛棄て相手を

追ふもあり汗馬の馳凌ふ体其やうす
面白き見物真の戦場も是に近うる
へ——とお思ひやられらるとありさて
肥後も出舍弟も諸士と目——車に
志ふひ亦あり五人に向ひて勝負
すへきやうふきにやう肥後書に出合
ての棄ぬけ棄凌ふて迹なる不達者
もめハ棄付られて馬を叩うれ——

若しあり志ふひお軍時をうり有りて
金鼓の約束を以て支方同時に相引
に―なる上下ともにも年當と不事い
ふく腰兵糧あり肥後守にも芝原に
障泥を志きめんつうの腰兵糧あり
茶年當もふく馬柄杓にて野中ぬ
水をのみてふくする末くの若いふふ
及いす馬にも後輪に付く―糠袋ぬの

大豆かひもを喰せめん法うにて
水を吞せける晩景に及ひて機嫌
よくぬり給ふといへり 老士語録

一元龜二年氏郷十六歳のとき織田
金友清口耐方ふか^隠れふき名馬あり
諸人は是を不望する輩多し―金友
忠口返答ふは馬を進すへ―但―
陣のあるとき一番小敵陣へ乗り

込て高名せんそ存せられ進すへ
と申すれふよりて誰も重ねて不
望するものありて猶るに蒲生聞
及ひて並に金方清けりもとみ初向ひ
まねての陣又先陣をうけ一番に
高名慥ふ被すへと告けし約束
しては馬を乞請たり十日勝り過て
武田信玄東兵濃ふ出張して列す

まらうとありし小氏卿の馬に
歩衆先陣ふ進み武田方より乍候ふ
出たる敵と出合引細て落首を以て
高名一血ふまみれて信長公の也前
ふせられたり金方清けりもと高名の
首を見せ約束を凌へさる告を語
られしらの信長公を始めこして
皆音をまきて祿美せられける
雑話
筆記

一 夏陣の五月六日水野隼人正組
松平助十郎勝信より来るハ今日の
一番ハ誰ハも阿るへうす我ハるへ
と云水野多宮より来るハ口廣き事
うな誰う其方よりハ一番さすへき
そや助十郎又曰く各よく歩給へ
今度組中一番の馬ハ某う馬あり
上田吉之元重秀より中子より大坪流

免状を承けたる者ハ我あり一番の衆人
一番の志あれハ我より先をかくる者ハ
あるまじきといひける果して一番に
衆出ハ敵陣ハ馳入情ふる討死を
遂るあり因組ハてハ松平庄九郎忠一
大島左大夫光盛山崎助次郎梁田平七
同平十郎競て戦死す 續武家閑談
一 高田より今町ハ陣取ありて諸方

四月廿中其外大名申御合され相
海て山城下へ西人數山城内より一左
右あるまての五のつち福荷の社内
出床机居とえられまより大車へ向ひ
出行列ふて出越遊のされたるふ通所
ふて見物多し出所人百姓第一高田
浪人立法といひ西人數通りうねる
出先人數の負支たるを流右急門見て
出用の妨けする者とも一歩拂ひ
通すへしとて十文字の襪を引付
聲を励まし下知志りられとも
見物の若も道を開くんとすれとも
後より強て押られのいんともすへ
きやうふく難段小見えたる其上浪人
た口く小我くの浪人ありむさとし
たる事りされましといひるに

歩行目付も泳ぎ儀——たりさうの
馬乗を以て乗^教ち^ノさせよとてし乗に
敷——ういやくまもい^行ちありも——
引落されも——ての先年の騎馬侍
引落され——と沙汰あるへ——所詮
狂ひ馬を牽せよとて劍馬を二三
疋小口取多——付て去先へ牽たるに
大勢の中かへ馬いれて劍狂ひける
ふそ皆く轉ひ倒れて片付たるまう、
其跡へ戻く也人数引續きて行——と
うや尤ある様轉の仕方と噂——たり
見聞随筆

一 清水太郎左衛門母の力を請絶大力の
名を得しりあるとき太郎左衛門
甲斐黒とてし馬を一疋持一口に大
夏を一斗——らふ悪馬なるゆへ乗との

ふー馬屋の内を出すにの中間六
七人にて綱を付てひき出す鞍置事
ふらす太席左清は馬に飛のり鞭
を赤てま^走りるとき股ふて志むれ
立下血を吐て死す太席左清は蛇ふ
りとも綱を付て棄へさふくのいうて
軍陣のとき用立へま^中やしく荒言を
吐しとあり 小條五代記

一 肥前龍造寺の住人勝山左近其^力か
九國小雙ふもめふー或とき國中
にか^徳れふま口強き馬ありこれを
棄小平みて駈出るこれを引て安む
はさけ血流るれとも安まらす城
門のく^語りを駈入んと額く^語りの
上の横木ふあ^語いらいたまうーと思ひ
手綱を放ち安^語をく^語りの上^語の

横本ふかけ股を以て乗たる馬を
ひと一め一めけれの口足を締め
て志め揚られ物を継ぐる形の
こゝろこれを見るもの舌を振ひ
其強勢を畏れたる 碎玉話下月

一 信長美濃國を以て其勇強智謀の
名阿るものを扶持せらるる美濃先
降元とよふ其中小稲葉氏に安藤

を勝れしとす稲葉ハ又其最一と
称せり信長紀伊の雜賀孫一席同
一と若友清の兄弟に説て降ら
しめんとす則ち使ひをやるに
使ひぬらす其殺さるや留めらる
やの問いすく分明あらず信長をねて
稲葉伊豫守に命す稲葉別ち彼
地小往て孫一席若友清ハ信長小

降り尾張小来りて幕下に属つの礼
をふすはとき信長孫一席に問て
曰く初めの使ひひめ何孫一席答て曰く
臣これを殺す信長曰く何の由ゆへふ
これこれを殺すや孫一席曰くその人騎
歩多しひひつれ兼て案内をも
通せす馬小乗ふうう俄小城門を叩き
信長の使ひと称して驕れる色あり

謀て臣を捕殺せんとするものあり
言禮失敬と思ひ本丸と二の丸の間小
入るとき門を閉前後より入込てこ
討果し信長曰く死らぬ
何の由ゆへ小稲葉を殺さるや孫一席
曰く稲葉ハ其神初めの使ひと大に
異ありまつ五六里間前より案内を懇懇
にいひ信長の使ひとて来る臣

櫓の上りてこれを見れ（此）の馬鞍をも
かささす城門のあふて馬より下立
徐ろ小歩み來るこれ（此）こそ禮義を知
れりと長大（此）の感——自身門を開き
て出迎へ内小招き入て口牒を聞ふ
義理明らふふ——て志うも恭敬あり
股引のまつれより見れの布の下帯
を——しうりこれ則七（此）身を候ふして

專ら武道（此）小用（此）ある志（此）——あるへ——良
士の風あるふ化せられて（此）帰股（此）す
と——ふ 同上

一 秀吉二十餘万の大軍を督搦して
小條氏政氏直入朝せさる罪を討ん
と——て天正十八年三月下旬沼津小
宿陣す小早川左衛門佐隆景の從兵（此）
河田八助猶崎十兵衛とて大力の

名を顯あひたる若あき八助あの大
指物十兵衛あの十八段の母衣あをかけて
通る秀吉あもあ小見あて使番あを以て
其姓名を問あせしる命あを承あて景あ付
馬上より主將の作あせふ各あの姓名を
申あされよとあ二士顧あて返答あ一カ
ら及あす馳歸ありてあとあせあの
秀吉あさての汝あちあ馬あふあて名あめれ

といひたるあんあ教書あふと帶
するあ或あの兩陣あ勝負あにかあるとあき
其折あふの佛神あの前あふてもあ馬
せぬ作法あありさあくあての何あそあふ
勝れたる大指物あをさあ普通あに
超あゆる母衣あをあかけあたる士あふあ馬
ふあきやそれあの無禮ああり返答あせぬ
こそ理ありありとて除人あを以てあ馬

一 して問せしるれの二士も亦下馬
して各其姓名をいふ 同上

一 伊達政宗卿小川作法いつも習
うせられすまゝ 田小幾夜も水と飲上
られゆふよき水出たゆとてい水徒
流を以て出供中へ作下されよき
水小川君何れもへ下さる下ふも
大へさせ馬の口を洗ひせゆへと作

られい新ふる水急き水路滑ふもその
不ふ馬を立下たせられふ若き水水を下
され息を出つうせゆて馬を召させ
られゆ惣して幾夜馬小召させ
ゆふも幸徳の方へ馬の尻をむ白
せられゆやうふなされゆ自身ゆ水
綱を引結ひ細き水綱ふて馬
を召させられゆ是とて軍陣の

由作法を思召し遊のされゆと啓
人あり巻く存し命期今期集

一延寶五年のころ酒井修理大夫忠直

仔細に付ありて閉門にておませし

家士ふり付らるるの馬をの一日二回置
ふしふよくとを入させよと宣ふ

家老としりすの當付に慎の行

いりしと申す修理大夫申さるるの閉

門の公迎の由旋ありし今ふも何事

そといへ一方を防ぎ固るの忠義我

り馬久し口を入されの乗ふ

我乗り料の勿論家中物頭をまた

馬のまたうき故うねりての不忠あり

さやうの和ふ心を附る事第一の慎み

ありしと申されけれの老臣ともみ

有感服す 謙亭筆記

一真田豆州或とき老中堀田加別へ
招請せらる外の車のふくて只馬
のみ由念入られ早馬駿馬多うりき
されとも見事とせうり中さるく
ふふ三寸まうりの草毛の太く逞く
きう四人めに弛出さうりさてくよき
具足下地といひて褒美す亭主中
さるく老人を顧みす辛勞さるく

招請いす事いさやさるる金言を
承るへきためふり 上極への由奉公
ふも成ゆる猶一言も承及より
され深更まで武の物語ふて退去
ありありあり 續武家閑談

一西山公常く由咄あさるく馬の尻下り
ふても後足は低くゆる用前ふの
よく在野是く馬の歩み馴たる

足ふみふれの平生も野足うよ
として柏子の馬の更ふは好ふされす
専ら武用ふのみは心掛勿論竹助ふと
舒へは車の第一不仁の至り用前め
とき役ふ立ぬ儀ありと作られは
西山遺事

一宗輝松平周防守諸侍へ作せ聞られは

高直ふる馬身上ふ似合すかひは事

無用ふりいもめことと一死したる
と手にまねて馬をもとむる
事成りし武用の心掛をも
かへ一丸よくかん志やうさへよけ
れはやすきを求め油断ふく持た
れやすへいと常く中倉られはし
まは馬すきふて早朝に馬屋へ
出たなされはやく侍流馬屋ふて

後く池月見せしよし 聞見集

一 細川越中守源重賢馬を好み給
ふ事世ふ勝れて草飼ひ口の取やう
また委しき志ろし召たりされ
とも駿足を求めず常ふ宣ひる
の馬の軍用のためふれ其性ふ任せ
てすくいらきよきを第一とす乗
手たふよけれのたしひ驚馬あり

ともその生れ付たるほとこの業の
出るものふり乗手抛尻あうの駿
足も用ふしされの我も其馬の祝
くふ後ひて性分を盡させん事を
のみんとすれの馬の唇悪のさま
て思ひすとして代金貳拾両ふるた
るをの求め給のさりしとも皆
足色おろしりし

根臺遺文

一水野故監物忠善ハ五万石ふて家中
に馬五百五十疋ほとあり二十人
扶持百石以上の飼料を出し馬を
持ふり常々往還筋ハ變事ある
しきハ馬の口付を兼て糧を持せて
出るあり予り知れるもの柘極後藩
とよ浪人百石ふて抱られたる馬
を持つ其親父清休とて七十まわり

ふるう肥前嶋原陣ふて首尾あり
しと聞給ひ極老の者を呼おし
清大夫とありしめ二十人扶持給り
是も馬持りり他所ふて少しふても
武士道の意地を立浪人したると
よものをの抱へらまわり五六百石
取るもの馬二疋千石とするもの
三四疋も持ありたし解の懸車を

止めて人と馬の多き車を好まれ
けるといへり 老士語録

一 土井大炊頭へ堀田か賀守小身の
時分に申されぬ私役殊外馬に
数寄不断馬にわづて居申し
かやうに申せぬて奉公の妨にふる
へくと迷惑惑のよー申されぬへ
大炊頭作られぬ馬小申数寄し

一 腹の車いふゆゑ後の中用にも立申す
へきとあり其以後大身になり申
されしとき大炊頭へ申されぬの
私小身のとき馬に数寄しへとも
大身に成りてより隙も是ふと
最前前のここと馬に数寄申す
ゆよー申されぬへ大炊頭申し
最前前のここと馬小申数寄たされ

すゆよー一限の儀より出たゆよー
かりまにつき加賀ちやさるゝ最寄
馬に数寄ゆよーやゆへの一限の儀と
作られ今又最寄のこ^ねとー馬に
数寄やさすゆよーやゆへの一限の
車と作られゆ車合意はるすゆ
よーやされゆ大炊取作られゆの
身の^叶と^叶の馬に数寄の馬上にて

清用立ゆにつきをとやゆ大身のとさの
馬にゆ数寄是あくとてもよき馬
多くゆたゆふつき一限の儀とゆ換
抄ありとそ 寛元聞書

一慶長五年八月廿一日河田の渡りを
越て波阜ふ向ふとき堀尾信濃ち
忠氏川岸ふ陣せらる池田あゆめ
先陣の士大将伊本清兵衛忠次使を

もて川を渡ししつ池田者共川ふ
歩入て後波されしへ今波の先陣の
池田者ゆりしるふてしとそ中ける
忠氏聞て暫く馬より下り立て吾
下知を待れしへと云のれけれ山田
多門兵隊十五歳軍のりふそ始てふ
りし馬より下んとするを後者馬
より下る事や比鞍の若輪ふえ付

てうつふ伏しふありて待せられよと
教へしうの山田志うしたりけるに
やありて忠氏の旗本小法螺の
聲うせしうの吾先ふし馬ふ乗りし
に山田志先小川ふ歩入て涉し
けるう遂に一番首をえたるの従者
の物馴しるゆへかりたり常山紀談
一阿部忠秋急の沛用ふて出城より

一 並に高崎へ出越成され此世とて俄
の車由へ出供の面く出跡より追々
罷越此小平田彈右邊の唯一人馬
上ふて高崎まで急つけ此よ一折
一も雪降り嚴寒小つさ

將軍家作ふハ雪由へ豊後書ハさそ
繼儀すへさよ一あり出例ふ相詰
られ此流出請ふハ上意のこ^如とく送

惑はるへくさりあう其身の棄物
小て落越此百寒氣を凌ぎ此ハんと
中上られ此処以の外は操嫌悪一
誰う免一して駕籠小急此やと
出立腹遊ハされ此よ一問もあ一
出歸府ふて出用向首尾よく一作上
られ出退此の取又御前へ召させ
られ棄輿以の外小思召され此むね

後くは所り是ありゆよ——是より
津用向ハ由弁——ゆへとも由言葉
撒り中さす至極は迷惑ふされゆ
其後隅田川へ成せられ還津の
とき駒形堂ふ寄せられ津輿居
り由馬方年若の面くふ浅草川を
馬ふて渡——ゆやう）作ゆされ別ち
上覽ありて景込くく川を渡——ゆ

このときハ忠秋由馬禎りふつき由支
配の面くも兼込ゆところ津目ふとま
り本意ふらすゆ不審を蒙るせ
られゆ不首尾ふゆへハ重ねて何
等の儀も是ありゆマままてと思
召切津筋より二町ふと川下へ兼
込ゆ誰そとゆだコトねゆへとも豊
後書とハ各憚りゆて中上すゆ処

あれハ豊後小てハふさう水不被練
ふてあふ危ふさう早く船を寄らう
にと上意ありて津前より各戸達
一由徒由小人沓駈走て早く船を
出し由やう中船を漕出し由處
其内小恙ふさう川を由乗越一ありて
上覧小入らる向よりハ船小て由もと
り直小津前へ由出らへハ津機極由快

犹小て前くのこととく由懇ふあうせ
られ由よ一 石道夜話

一 元大将の馬を擇ふ小心得あるへ
きふや甲斐の武田家小て米澤
といひ一もの奥州小往て馬を
求るとき信玄一首の和歌を書て
興へらる

上驛の中の驛こそ大将の

乗へき馬と志れやものぬ

信玄五十足の馬の中小軍小多うれ
一馬の目足栗毛中候とて只二丈
あり甲斐の山梨郡と一のとりふ
取の百姓は目足を養ひ並一を
米澤見ても又なき馬ありと信玄
ふ中て五十貫の地を典へては馬
を信玄小奉りぬ今泰平久くあり



て馬を擇ふの理を知らなく益
ふき観の羨小黄金を費す事に
ありぬ是皆上より下小至るまで
軍旅小明うありぬぬあり

常山紀談
諸將物語

